

グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第17章



まるで戦う天使のように、星々は西の地平線の向こうに沈み、また別の星々が昇った。

そして反対方向から追跡した。その間には、神聖なるタイタニックの星々が黒い天空を横切り、オリオン座の星々の剣の下では、たった一組の翼が夜空を支配していた。風の海の上を、ラザロは天と地の間を通り抜け、フランスの田園地帯のはるか上空を飛び、薄明かりの深みへと、前へ、上へと突き進んでいった。

広大で絶えず変化する世界の姿が、森、野原、丘、谷、小川、そして川を伴い、彼の足元を静かに流れていった。創造のすべてが彼の傍らを駆け抜けていく中、彼の東への旅は決して揺るがなかった。修道士を迎えに行き、遠い昔に亡くなった司祭への従者の厳粛な約束を果たすという、彼の揺るぎない決意もまた、決して揺るがなかった。

しかし、夜明けの細い赤い線が東の地平線にはっきりと現れ、空はもはや彼の進軍を歓迎しなかった。ラザルスは天から滑り降り、探していた目印を見つけた。遠くには、幅広く曲がりくねった黒い帯が木々の梢の谷間を縫うように流れていた。それは明らかにロワール川だった。

彼は修道院の多くの地図からその特徴とおおよその位置を把握した。彼は川の谷の中心部に身を隠し、森の樹冠を掃射した。川を越え、森を過ぎると、彼は急旋回し、さらに高度を下げて、渦巻く水面の真上に水平飛行に移った。そして、深い影の中で、

谷を下り、ラザロは黒い動脈をたどってレオン湾へと向かった。

翼を広げたラザロは、川の谷を包み込む冷たい空気から、新たな冷気を感じた。湿った空気は沼地のような悪臭でひどく汚染されていた。腐った雑草、腐った木、淀んだ泥水たまり、菌類、そして死んで再び湿った魚の混じり合った臭いは、最近雨が降ったことを物語っていた。ラザロは迫りくる太陽から逃れるため、川の東岸に身を寄せた。しかし、沼地の川岸は、浸食された肩のような場所で、その上には木々が張り出し、場所を奪い合っていた。多くの木は生氣なく傾いており、またある木は根をむき出しにして、まるで脚を広げたように広がり、その間には湿った動物の巣穴があるだけだった。夜明けが近づき、安息の地が見当たらないラザロは、足早に進んだ。

ラザルスは川の曲がり角を猛スピードで駆け抜け、西岸の支流に目を向けた。ロワール川から細い水路が分岐し、暗闇に包まれ、絡み合った茂みのカーテンのような天蓋の後ろにほとんど隠れていた。彼は急旋回し、川は下草をかき分け、泥だらけの小川を縫うように進み、ねじれた枝や倒れた幹を避けながら進んだ。足元には、小川の淀んだ淀みが黒い鏡のように映り、まるで時を刻む時計のように、彼に何かを思い起こさせた。その水面に、木々の梢のシルエットが浮かび上がり、天の赤く染まる光を背景に、枝が暗く広がっていた。彼は時間を失いつつあった。太陽は容赦ないことを知っていた。そして、厳しい決意と揺るぎない覚悟で、ラザロは冥府の荒野へとさらに深く進んでいった。

狭い水路は、ねじれた木の枝のように荒野を蛇行し、その岸边は、隣接する曲がりくねった小川と混ざり合って変形し、雑草が生い茂っていた。

入り江や苔で覆われた空洞。さらに奥深くでは、岸边は低地に変わり、あらゆる方向の地面は完全に水没し、目に見える痕跡は何も残っていなかった。

水路　まるで森が黒いガラス板から生えてきたかのようなようだった。実際、ラザロは夜明けの恐ろしい光と、その光が水面に反射する様子にひどく悩まされていた。彼は光と闇の狭間に完全に閉じ込められ、枝が密集した森の中を飛び、水面の上を漂っていた。

深さは不定だ。しかし、彼は木々が生えていない曲がりくねった道をたどった。成長しながら、小川の本来の流れに沿って進み続けようと願っている。

彼は洪水に見舞われた奥地を突き進み、両側にはねじれて震える黒い壁のように木々が押し寄せてきた。やがて空と水は深紅に染まり、まるで血の海が対峙しているかのようだった。寒さはとくに翼から消え、顔はまるで熱風にさらされたかのように焼けるように熱かった。ラザロは目を細め、遠くを見渡すと、待ち望んでいたものを見つけた。小川が姿を現し始め、泥だらけの肩を水面から持ち上げたのだ。さらに進むと、かつて水に覆われていた墓場から立ち上がり、よりはっきりとした姿で、より幅広く、よりまっすぐで、より力強い姿を見せた。洪水に見舞われた低地が後退するにつれ、かつての泥の筋は峡谷へと、そして小川へと姿を変え、やがて森の境界線を押し戻す川へと変わった。暗い沼地の木々は、背が高く垂れ下がった川草の列の陰に隠れ、草の間には、さらに高くそびえる直立した茎があり、その先端は空に向かって膨らんだ灰色の羽毛を天に向けて垂らしていた。彼は水路の中心部をまっすぐ狭いコースで飛び続けた。

すると、それはまるで天からの恵みのように、川の北岸に突如として姿を現した。ラザロはそれを通り過ぎたが、水面を大きく旋回してから、水浸しの土手の雑草の中に身を隠した。彼は疲れた翼を折りたたみ、踵に体重をかけ、燃えるような空に目を閉じ、さらに深く息を吸い込んだ。それから彼は頭を下げ、両手を膝に置き、鼻先から汗が滴り落ちる中、激しく呼吸した。

彼は川岸に目を向け、ぼろぼろになった漁網が一部水面に浮かび、残りは泥だらけの岸辺のぬかるみに沈んでいるのを見つけた。水中で網の下に閉じ込められた少女の頭らしきものが、ラザロの目に留まった。少女は口を大きく開け、眠そうな目で彼をぼんやりと見つめていた。まるで千匹もの小さな虫が一斉に揺れているかのように、彼女の広がる髪は打ち寄せる波に揺れ、まるで動かないはずの体の一部が、超現実的な動きを見せているかのようだった。しかし、それは彼を惑わすだけだった。それは、壊れた人形の沈んだ頭だったのだ。

近くの茂みに覆われた岸辺に、彼は朽ち果てたボートの残骸に気づいた。水浸しになり、バラバラになった船底板が岸辺に平らに横たわっていた。

そして泥と雑草の下に半分隠れていた。ラザロは立ち上がり、近づいてみると、水たまりの跡を見つけた。それは重そうな男のブーツの跡に一致しているように見えた。彼の目は、押しつぶされた雑草の道を通して、その跡を追った。堅固な石造りの建物の角に、板戸が立てかけられていた。真新しい足跡はあったものの、その一帯は廃墟のように見えた。建物は生き生きとしたツタと勢いよく伸びる若木に覆われ、絵のように美しい姿は、飢えた森にゆっくりと完全に飲み込まれていくかのようだった。しかし、その外観は完全に食い尽くされたわけではなかった。外壁の上端に沿って、ひび割れてはいるものの、それ以外は安定した外殻から、腐った木材が二列に突き出ている。突き出た木材の平行な列の下には、長方形の変色が見られ、かつて窓があったことを示唆していたが、現在は新しい石で塞がれている。荒れ果てた状態にもかかわらず、ラザロにとって、その建物は日光から身を隠せる聖域のように思えた。彼は赤い空を見上げ、足跡を見つめ、キリスト教徒の飛行士がなぜ神の良き日の光から身を隠さなければならないのかを、どう説明すれば最もよく理解できるだろうかと考えた。

「中は空っぽか？」ラザロは慎重に雑草をかき分けながら呼びかけた。ドアをノックした。「ちょっとお話してもいいですか？」彼は耳を澄ませ、中の音を聞き取ろうとした。「もしかして、ここにいらっしゃいますか？」周囲の茂みでコオロギが絶えず鳴いている音と、おそらく驚いたカメが遠くで水しぶきを上げる音以外、何も聞こえなかった。ラザラスはドアに手を押し当て、少し開けてから声に出して尋ねた。「誰かいますか？」慌てて逃げるクモが中から飛び出し、彼の横を走り去った。彼はドアをすり抜け、真っ暗な内部へと足を踏み入れた。「ここは空っぽですか？」

ラザロはすぐに戸口からよろめき出て、口に手を当て、おそらく創造物の中で最も恐ろしく吐き気を催すような悪臭にむせび泣いた。彼は急いで雑草の中を逃げ、吐きそうになりながらえずいた。それから彼は振り返り、まだ咳き込みながら戸口をもう一度確認した。建物の開いた口から沸騰するように、無数のハエが飛び出してきて彼に加わった。ハエたちは一斉に彼の頭の周りを旋回し、超現実的で幽玄な、唸りを上げる光輪のようだった。ラザロは彼は彼らを見た。そして東の方角を向き、糸杉の細い隙間から覗き込むと、森の樹冠の上部に差し込む最初の光線が見えた。

上流には他に避難場所は見当たらず、あるのは泥だらけの岸辺と覆いかぶさる茂みだけだった。肌に絶えず感じる灼熱感は耐え難く、夜明けを思い出させた。彼は建物の、嘲るように大きく開いた扉の方を向いた。その扉はまるで息を吐き出しているかのようだった。

絶え間なく、悪臭を放つ息は、まるで死にゆく犬の喘鳴のようだった。彼は眉をひそめ、肩を後ろに反らし、深呼吸をして、再び建物の中に入った。ラザロはドアを閉め、悪臭と暗闇に飲み込まれた。

彼は鼻を手で覆い、閉まったドアに背を向けたまま、微動だにせず立っていた。その間に、瞳孔が幾重にも重なった暗闇を剥がし、囲いの内部の構造 石の床、何かのテーブル、さらに別のテーブル、そしてもう一つのドア を識別した。

悪臭に目から涙が溢れた。その悪臭は暗闇よりもさらに濃く周囲を覆い、地獄の煙突から出る排気のように、彼の目を焼くようだった。パチパチという音とブーンという音が途切れることなく響き渡り、

建物の中。彼は目を拭い、険しい表情をした床と壁に視線を向けた。暗闇の中で、それらの表面は波打っているように見えた。波打つような動きは、彼の涙目のせいではなかった。床と壁の表面は実際に動いていたのだ。うごめくハエとゴキブリの大群がそれらを覆い尽くしていた。

沸騰するような暗闇の中、建物の輪郭がさらにはっきりと浮かび上がってきた。頭上には、ラザロが目にした、弓なりに曲がった木製の梁が並んでいた。それらはまるで、さらに高い天井の下に吊り下げられた、大きく広がった空洞の肋骨のようだった。無数のロープや鎖が至る所から垂れ下がり、その端には様々な金属製のフックや返しを取り付けられていた。多くの梁には、丸まって平らになり、乾いた死んだ魚がぶら下がっていた。そして、それらの梁の上には、おそらく百万匹ものハエが、内破した目に群がっていた。

ラザロは魚小屋の中央へと歩みを進め、低く垂れ下がった鎖をかき分けた。鎖は彼の行く手にガラガラと音を立てた。彼は、まるで独立した島のように小屋の中央に鎮座する長方形の木製のテーブルのそばで立ち止まった。その粗末なテーブルの表面全体には、まるで刃物で何度も叩かれたかのような、深い線状の跡と不規則に重なり合った溝が刻まれていた。彼はその染みと穴だらけの表面に指を滑らせ、それから建物の壁を改めて調べた。

それらを見ると、修道院の地下墓地で見たものとよく似た、松明を掛けるブラケットが並んでいるのに気づいた。彼は入り口の方を振り返ると、その横の壁際に背の高いバケツが置いてあるのが見えた。バケツの中には、逆さまに立てられた木製の松明がずらりと並んでいた。

そのバケツは、蓋付きの小さめのバケツで、おそらく松明の燃料として使う油蒸留器だったのだろう。

彼は振り返り、建物の最も暗い部分を覗き込み、丸まった魚の死骸を通り過ぎて奥の壁の方を見た。長い作業台が壁一面を覆っていた。作業台の上部には、皮剥ぎ道具、固まった魚の頭、塩の塊が散乱していた。テーブルの下と床の上には、きちんと畳まれた衣服の山があった。ほとんどがローブやドレスで、ネズミの糞で覆われていた。一番上の衣服は最近畳まれたように見えたが、さらに下の方、そして

床に置かれた衣類は、ひどく朽ち果てていた。布の山の横には、作業台の下にきちんと並べられた靴が並んでいた。新品のものもあれば、古いものもあり、中には齧歯動物にかじられたように穴が開いたボロボロのものもあった。それでも、靴や衣類は他のものと一緒に、きちんと整然と並べられていた。非現実的、いや、不気味にさえ思えたかもしれない。

しかし、ラザロがテーブルの裏側を見て最も異様など感じたのは、おそらく、その脚の間に、極めて秩序だった状態と荒廃した状態が、まさに同じ空間を共有していたことだったのだろう。

ラザロは顔からハエを払い、乾いた嘔吐でえずき、作業台を離れた。しかし、周囲の悪臭をそのままにしておくことはできなかった。

それは肌にまとわりつき、息を詰まらせるような臭いで、どんな男の喉でもひっくり返りそうになるほどだった。彼は囲いの残りの部分を調べ、そのひどい悪臭は干し魚からではなく、おそらく

湿っぽく、さらに恐ろしい水源。彼の目は南へと続くハエの群れを追った。

壁に向かって、太い金属製の留め金が付いた、背の高いぼろぼろのドアの方を見た。彼は耳をそばだてて、その向こうから響く一定の低い唸り音に耳を傾けた。それから、彼は視線をその敷居の隙間に落とし、忙しい蜂の巣のようにたくさんの虫が出入りしているのを見つけた。ラザルスは首を傾げ、空気を汚す原因は、傷だらけの扉の向こうから台無しにした。

好奇心が彼を駆り立てたが、イワンの威厳ある声が彼の心にこだまし、禁断のベニオンネルについて警告し、「絶対に、ここだけはだめだ、ラザルス。ここ以外の地下墓地は自由に歩き回っていいが、ここだけはだめだ」と言った記憶が蘇った。

いや、好奇心の真実は、獣の心に宿る欲望と同じくらい野蛮な欲望を掻き立てるほどの誘惑を呼び起こす能力にあるのかもしれない。さらに、どんな獣が意志の冷たい規律に従うことができるだろうか。

燃えるような好奇心の苦しみさえも無視する無知とは？ラザロは鎖の音をかき分け、高い扉へと歩みを進めた。背後では、蚊や紙のように薄い魚の群れが分かれて閉じていた。彼は高い扉の門を外し、大きく開け放った。

ドスン！ゴツンゴツン！ラザロは飛び退き、転がり落ちて敷石の上を転がる頭に向かってシューッと音を立てた。突然、その背後で、開いた戸口から虫の群れが轟音を立てて飛び出し、まるで無数の小さな外骨格の天使が解き放たれたかのように梁へと昇っていった。女の頭は揺れたまま、乳白色の目でラザロを見上げ、首からは幼虫がクリーム状の塊となってこぼれ落ちていた。ラザロはぐるりと身を翻して目を閉じた。そうすることで感覚が解放され、この恐ろしい出来事が記憶に蘇るのを止められると思ったからだ。しかし、彼が鮮明に思い出すことのできる過去の出来事すべてと同じように、それは手遅れだった。完璧な記憶力は、人生最悪の出来事の細部にまで思いを馳せることを要求するほど、贈り物であり呪いでもあったのだ。今このクリーム状の塊のように。

ラザロはブヨにむせて咳き込んだ。彼は背の高いぼろぼろの扉の方を向き、そっと近づいた。開いた戸口から、彼は非常に広いが浅い隣の部屋を発見した。その部屋は南側の壁の全長にわたって広がっているように見えた。自分が魚小屋にいることを悟ったラザロは、その部屋が塩漬けや燻製にした魚を保管するための、より衛生的な独立した空間として使われているのだろうと推測した。しかし、閉ざされた扉の向こうにあるその狭い部屋は、正反対の目的、つまりその中の物が建物全体を汚染しないようにするためのものだったようだ。

扉が開くと、ラザロは部屋の床に裸で首を切断された死体が積み重なっているのを発見した。おそらく50体以上、すべて女性の遺体で、大きさは様々だった。そして、それらはすべて整然とした隊列を組んで横たわり、両腕は体の横に、首の穴は北、つまり扉の方を向いていた。遺体全体は、まるで丁寧に積み上げられた薪の束、あるいは折り畳まれた衣服の山、あるいは整然と並んだ靴の列のようだった。衣服と同様に、死体も徐々に腐敗が進み、床に近づくにつれて、個々の身体の特徴は、腐敗が進んだ暗い塊の中に溶け込んでいった。

一番下の段は、虫がうごめきながら煮えたぎる瀝青を思わせる、継ぎ目のない層だった。そして、そのおぞましい山の一番上には、眠そうな目をした頭が横たわり、何も無いところを見つめていた。それは、おそらく人類のあらゆる境遇の中で最も絶望的なものだったのだろう。

「うわっ！」ラザロは後ろに駆け戻り、置き忘れた頭を拾い上げ、それを

彼は部屋を出て、背の高い扉をバタンと閉めた。頭がくらくらする中、魚小屋の中央にあるテーブルに向かってよろめき歩いた。再び、彼は汚れた困いを見回し、誘惑的な外扉に目を留めた。その向こうの空気は清らかで、地面にはアリやゴキブリもないことを彼は知っていた。しかし、敷居の下から漏れる柔らかな赤い光から、死神がその扉のそばに潜んでいることも彼は知っていた。ついに夜明けが訪れた。魚小屋は残りの日々を過ごす彼の避難所だった。

その日。彼はブーツについた虫を踏みつけ、テーブルの上に登り、梁を軽く点検してから、梁の間を飛び移った。彼は梁にまたがり、下を向いて横たわった。そこで彼は、天の燃える戦車と、虫だらけの地獄のような床から安全な場所に横たわった。そして、その外向きの

煉獄のような状態、天国と地獄の狭間にいるラザロは、より夢の世界へようこそ。

~*~

ドンドン、ドンドン、シューッ！ドンドン、ドンドン、シューッ！ラザラスは、ぬかるんだ地面を這いずり回る大きな獣の音に、不気味で不自然な一連の音で目を覚ました。その獣は、重い前肢を何度も泥に叩きつけ、生気のない後肢を引きずっていた。ラザラスは階段の間から聞こえる荒い息遣いを聞き、修道院の地下墓地の井戸穴で、タテウス卿が怪物がミゲル卿を襲ったと信じていた日のことを思い出した。確かに、ラザラスは今、息切れして傷ついた海の獣が、海岸線から這い上がり、腐敗する最後の場所を見つけようともがいている音だと想像し、まさにそのような音を聞いていた。

ラザラスは横向きに転がり、顔をしかめて、宙吊りになった自分の重みで胸と脚が梁に押し付けられているところをさすった。彼は立ち上がり、梁の上にしゃがみ込み、外扉の敷居とその赤い光をじっと見つめた。

かつて彼が思い出した深紅の光は、今や別の色合いの赤、つまり死にゆく赤に見え、梁に残る痛みから、夜明けがついに夕暮れへと移り変わったことを彼は悟った。

「もうすぐ夜空は自分のものになる」と彼は自分に言い聞かせた。しかし、彼は敷居の光の中に現れる影を捉えた。物音が大きくなる。彼は息を呑み、心臓が激しく鼓動した。もしドアが開いて、わずかな光でも反射したら

ドーン！ドアが勢いよく開いた。太陽の光が噴水のように床に降り注ぎ、

ゴキブリの大群が渦巻いていた。虫の波が影の中へと押し寄せた。ラザロは日焼けした顔をそむけ、目を閉じた。顔をしかめ、顎を食いしばり、彫像のようにじっとしていた。目が見えず、警戒している状態で、彼は不穏な騒ぎが魚小屋へと伝わってくるのを聞いた。まるで、引きずりながら喘ぐ海の怪物が、建物の腐敗した内部の方が死ぬにはより魅力的な場所だと考えたかのようだった。

しかし、獣の前肢が地面を叩くような音は、やがて人間のブーツが敷石を叩く、より特徴的な音へと変化した。ドアの蝶番がきしみ、眩しい日光が薄暗くなった。ラザロは目を開けた。彼は下を見下ろした。

魚小屋の内部に背を向け、ほぼ閉まったドアの隙間から覗いている男を見つけた。彼は疑わしい、あるいはいたずら好きな男、彼は中に隠れて外をスパイしている。

梁の上の影から、ラザロは侵入者の後ろ姿を見た。ずんぐりとした体格で、脂ぎった黒髪がふさふさと生えている男だった。クリーム色のローブの裾には泥の染みがついており、ローブの下には、ラザロ自身のものとよく似た、泥の塊がこびりついた黒いブーツが見えた。男のブーツから部屋の中央に向かって、泥だらけの足跡が続いていた。傷ついたテーブルの方を見た時、ラザロは以前聞こえていた引きずる音の原因と思われるものを見つけた。床に上向きに横たわる、力なく垂れ下がった繊細な手が見えたのだ。しかし、ラザロの視点からは、長いテーブルの天板が視界を遮り、青白い手以外は何も見えなかった。それでも、梁がきしむ音を立てる危険を冒してまで、それ以上詳細を知ろうとはしなかった。

やがて男は戸口からそっと離れ、背の高いバケツから松明を集めた。それから、小さめのバケツの蓋を開け、松明に油を染み込ませると、魚小屋の周囲を回りながら、壁に取り付けられた金具に松明を差し込んでいった。火打ち石を数回カチッと鳴らすと、小屋全体が燃え盛る松明の光で照らされた。それから外の戸口に戻り、少し外を覗き込んだ後、頑丈な横木で戸口を閉めた。最後に、くると向きを変え、奥の壁際の作業台と、きちんと積み重ねられた衣類や靴をじっと見つめた。一度手を叩き、祈りを捧げる手の指先を微笑む唇に当て、まるで豪華なごちそうを堪能するかのよう微笑んだ。

ラザロは男の顔の特徴の細部に気づいた。オリーブ色の肌、硬い黒いあごひげ、黒い目、そして突き出たくちばしのような鼻。男の顔はラザロにとって見慣れないものだったが、最も気になる特徴は

彼の目の間隔は不自然だった。肉付きの良い顔立ちにもかかわらず、その男の狭く離れた目は、全体的に見てかなり不気味な一つ目の怪物のような視線を放っていた。

男の顔はたちまち変わった。笑みは険しい眉の下にしかめっ面になった。彼は前に進み出て、床から生氣のない女を持ち上げ、テーブルの上に縦長に置いた。女の両腕を体の横に置き、テーブルの中央に位置させ、まるで等身大の人形のように姿勢を整えた。ラザロが彼女を見下ろすと、彼女は深い絶望を叫びながら、大きく青い目で彼を見つめ返しているように見えた。しかし、その恐怖は

彼女の目は、リラックスした表情とは対照的だった。嫌悪と自己満足という相反する感情を抱きながら彼を見つめているようで、その表情には、苦悶の眼差しと口元に浮かぶかすかな笑みがはっきりと表れていた。そして彼女はそこに横たわり、彼を見上げ、彼の目を貫き、おそらく天国の底まで見透かすような視線を向けていた。男が彼女の服を脱がせ始めた時でさえ、男の指は、寝たきりの娘を愛する母親のように、注意深く、そして丁寧に動き、衣服の縫い目一つ一つをきちんと畳み、テーブルに縛り付けられた遺体の傍らに積み重ねていった。

ラザロはよろめき、バランスを取り戻そうと梁につかまった。彼は口に手を当て、突然襲ってきた吐き気に顔をしかめた。ハエの羽音と虫のカチカチという音の中、ラザロは男の荒い息遣いを、痰のゴボゴボという音も含めて、すべて聞き取った。そして、男の太い指が最後の衣服を優雅に撫でて畳む様子をじっと見つめた。ラザロには、その指は熟練した漁師の手には似つかわしくなかった。ふっくらとして柔らかそうに見えたのだ。彼の父の、長くて細く、皮膚の厚い指とは違っていた。いや、彼自身の指とも違っていた。

男は死体の衣服と靴を奥の壁まで運び、作業台の下、他の人間の衣服がきちんと並べられている場所に置いた。そして、ラザロに背を向けたまま、カウンターの上の品々に忙しくしていた。男が肩越しにラザロに呼びかけると、ラザロはびくっとした。「私は漁師だ。すべての人々のための漁師だ。ここからは出られないぞ !いや、一度魚小屋に入ったら、誰も逃げられないのだ。一人たりともだ !」

ラザロは息を呑んだ。

漁師は続けて言った。「私の言うことを信じないのか？」

ラザロは返事を拒否し、男は皮剥ぎナイフの先端を作業台の天板に突き刺し、「お前が沈黙を続けるということは、お前はそう信じなさい。しかし、私はあなた方に別のことを教えよう。誰も私から隠れることはできない。あなたでさえも。私はすべてを見ている。特に悪魔の行いと行いを！」

しかし漁師はラザロの方を見ようともせず、背を向けたまま塩の塊をかき集め、それを細かく砕いて細かい粒状にした。彼はその塩を手のひらに集め、まるで体を洗うかのように腕や首に塗りつけた。そして突然、大げさなむせび声を上げ、喉から分泌物を吐き出し、ブーツのそばに吐き出した。

ゴキブリが逃げた。「もう一度だけお願いするよ」漁師は叫び返した。テーブルの上に置かれたナイフを振り下ろし、「信じないのか、悪魔の子よ？答えてみる！」

むき出しの梁の上で身の危険を感じ、めまいがますますひどくなるにつれ、ラザロは敗北を認めた。彼はため息をつき、空飛ぶキリスト教徒としての自分の紹介について考えた。

男は作業台から飛び出し、ナイフを振り回しながら裸の死体の髪をつかんだ。「答えろ、魔女め！」男は死んだ女の頭を揺さぶり、刃を首に押し当てて叫んだ。「今なら信じるか？」

ラザロは横木を握りしめ、股の間から下を見下ろし、自分の下で起こっている一見すると幻想的な出来事を見下ろした。

「ああ！それで自白するのか」漁師は死体に向かって叫んだ。「全てを失った時、弁明する術がない時だ！」そしてまた、愛情深い母親のように、彼は彼女は深くため息をつき、微笑んでから、彼女の髪を優しく撫でて整え、「ゆっくり休んで、「愛しい人よ。」彼は彼女の白目を舐め、さらに慰めながら、ラザロがまだ聞き取れたかすかな声で言った。「涙を流す必要はない。魔女は泣いてはいけない。悲しみを感じるのは、可愛らしい小さな花だけだ。」

ラザロは漁師が作業台に戻るのを見ていた。男は彼は刃を研ぎ革に当てながら、死んだ女性からの言葉にならない質問に答えるかのように、「そうだ、君は美しい。そしてほとんどの人よりも美しい」と呼びかけた。なぜ？」

ラザロは頭がくらぐらし、胃がむかむかした。怠惰なハエが彼の顔にまとわりついた。

男は一人でくすくす笑い、声を出して言った。「お前なんかとは決して付き合わないぞ、女。私を誘惑することはできない。お前の策略はお見通しだ。花を装って、邪悪な種を隠そうとしているんだな。」

ラザロは咳をこらえた。彼は建物の内部を見回した。その時になって初めて、彼は自分の吐き気の原因に気づいた。立ち昇る松明の煙が天井に絶えず集まり、彼の呼吸を妨げていたのだ。彼は梁の上に留まることはできなかった。

彼は外のドアの敷居の方を見たが、外にはまだ致命的な量の夕日の光が残っていた。魚小屋から簡単に逃げ出すことはできなかった。彼は振り返って、高くぼろぼろになったドアをちらりと見てから、再び漁師の広い背中に視線を戻した。咳をしたくなる衝動がますます強くなってきた。彼には他に選択肢はなく、切迫した対決と、自分の存在を力強く示すしかないと悟った。

彼は音を立てないように動き、両手を木材にしっかりと固定しながら、死んだ女の上にそっと身をかがめた。それから、テーブルの上に立ち、女の両側に足場を固めた。女の上にしゃがみ込んだまま、彼の目は漁師から離れなかった。彼は息を止め、全身の力を振り絞り、姿勢をひねり、重心を移動させ、ブーツが静かに床に着地するまで続けた。

彼は猫のように小刻みに、鉄格子のはまった外扉へと歩み寄り、光り輝く敷居の手前で立ち止まった。しかし、振り返る前に 手を上げて自分を抑える前に 彼は咳をした。

ラザロと漁師はくると向き合って、互いに向き合った。驚いた男はナイフは敷石の上を回転しながら転がり、北側の壁にぶつかって静止した。ラザロはナイフから視線を外し、翼を広げて漁師に向かってシューッと威嚇した。

「近づくな！」男は叫びながら南側の壁際へ後ずさりした。ラザロは身支度を整え、翼を広げ、門番として留まり、まだ買える余裕がなかったが、日の光の下に開かれた。「その場にとどまれ。」
「ああ、そうしましょう ここ ここです、もしあなたが望むなら」と男はどもりながら、彼の傍らには壁石が並んでいた。ゴキブリは逃げ去った。彼は建物の向こう側をちらりと見て、皮剥ぎ用の刃が置いてある場所を確認した。

ラザロの視線は彼の視線を追った。彼は唸り声を上げた。「そのままにしておけ！」二人は中央のテーブルとその上の死体越しに視線を交わした。「そこに座れ。」しかし、男が立ったままだったので、ラザロは付け加えた。「私はまもなくここを去る。お前が座るなら私も座る。そうすればどちらにも危害は及ばない。」二人はゆっくりとしゃがみ込み、二人の視線が死体と屠殺台の下を通過したちょうどその時、再び互いの視線が途切れることなく交わった。そして二人は踵をついて座り、静かに互いのことを考えていた。

やがてラザロは、かすかに光る背後の敷居を改めて確認した。

「夜になるのを待っているんだね？」と漁師は尋ねた。

「まもなく私はあなたのもとを去るだろう」とラザロは言った。

男はうなずいた。「そうかもしれないな。夜はすぐに来る。」彼はうめき声を上げ、床にきちんと座るように体勢を変えた。背中を壁にもたせかけ、膝を立てて腕をその上に置いた。「どうやって封印された扉から入ってきたんだ？この魔女がお前を召喚したのか？お前は何者だ？悪魔か？」

「私は屋根の梁に腰掛けた。私は悪魔ではない。」

「ああ！もちろんあなたは悪魔ではないでしょうが、その翼と牙はそう思わせるものでした。」男は咳払いをして自己紹介をした。「私はアマド・ガストン、バラバス・ガストンの息子です。もしよろしければ、お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

あなたは有名人ですか？

「ラザロ 空飛ぶ男だ」と彼はぶっきらぼうに答えた。

男はゆっくりと深く頭を下げた。「光栄なのは私の方です、ラザロ。空飛ぶ男よ。」

ラザルスは浅い返球の弓を放った。

好奇心旺盛な漁師は、二人の間に残っていた沈黙を破り、「私は優れた漁師であり、博識な書記であり、多くの不思議に精通しているが、この世の何者でもない」と自覚しているが、あなたの翼のある姿は私の心を深く悩ませている。実際、もし私がただの敬虔な人間であったなら、あなたを悪魔そのものだと断言するだろう。」彼は肩をすくめた。「しかし、私はそのような人間ではないし、したがってあなたは悪魔であるはずがない。だから、この偶然の出会いを、この世のもう一つの驚異 生身の人間が空を飛ぶという驚異 についての教訓として受け止めるべきなのかもしれない。」

彼は身を乗り出してうなずいた。「あなたは真実を語っているのか？あなたはただの空飛ぶ

男よ、そして君はすぐに旅立つだろう、そうだろう？

「私は嘘をついていません」とラザロは答えた。「私はキリスト教徒の飛行士です。まもなく旅立ちます。」

「まあ、私はキリスト教徒ではない」と漁師は宣言した。「だが、嘘もつかない。私は自分自身に高く期待する、善良で高潔な人間だからだ。」彼は眉を高く上げ、まるで自分の良い面を見せようとするかのように髪をかき上げた。

それから彼は自分の爪を突き出し、じっくりと観察した。その後、唇をすぼめ、指を唇に当てて考え込んだ。おそらく、自分の非の打ちどころのない能力を誇張して見せようとしたのだろう。「ああ！」彼は指を鳴らし、ラザロの方を指差した。「その名前を突き止めたぞ。」

"名前？"

「そうだ。君との出会いを題材にした詩のタイトルだ。きっと人を魅了する作品になるだろう。」

彼はニヤリと笑った。「そして世界中の人々がその詩に驚嘆するだろう。」

彼は両腕を天井に向かって広げ、まるで空全体に語りかけるかのように両腕を大きく振った。「そして、この詩の題名は『自らをキリスト教徒と名乗る翼のある悪魔』とする。」

「それは嘘だ。そして君は嘘をつかないと主張している」とラザルスは述べた。

「そうだろうか？ほら、悪魔でさえ嘘をついていないと主張するかもしれない。そして、神を畏れる人間なら誰でも、お前を見たらお前を悪魔だと断言するだろう。」

「しかし、あなたは神を恐れていないと言いましたよね。」

「確かに。しかし、そのような聖句を読むような人々は、神を畏れている。」彼は肩をすくめた。「つまり、神を畏れると自称する一人の飛行士の言葉と、神を畏れる世界中の人々の言葉、どちらが正しいか、ということだろう？」

「私は悪魔ではない。そのような虚偽の記録を作成するのは嘘だ」とラザロは非難した。

「誰に対して？あなたのたった一つの主張が、それとは正反対の100の主張にどう反論できるというのですか？」

どうしてあなただけが正しくて、百人が間違っていると言えるのですか？あなたはそんなにも神のような存在で、そんなことを主張できるのですか？

「私は誰よりもこの真実を知っている。私はキリスト教徒の空飛ぶ男であり、悪魔ではないふりをしている悪魔ではない。」

「しかし、百人の声に一人の声で反論できる者がいるだろうか？」彼は首を傾げた。

「私を含め百人が間違っているとしても、正しい。」

「ああ、素晴らしい！」漁師は手を叩きながら叫んだ。「あなたの短い言葉で

防衛に関して言えば、あなたは千人もの人々の主張に反論したのです！

ラザロは顔をしかめた。「何をしているんだ？」

「私はあなたと話をしている。そして、あなたの要望通り、私はここに座っている。」

「いや、なぜ彼らにそんなことをするんだ？」彼は死体を指差した。

「ああ、魔女か」と彼は不機嫌そうに手を振りながら答えた。「みんな同じで、誘惑して男たちの善良な心は、悪しき利益のために利用される。彼女の言葉に耳を傾けるな。」

「お前が彼女を殺したのか？」

男はくすくす笑った。「魔女退治屋は魔女を殺すものだ、相棒。それが我々の仕事だ。」

そして、あなたが自称するキリスト教徒であるならば、魔女の異端審問について聞いたことがあるでしょう？彼は二人の間を指さし、さらに尋ねた。「もし私が謙虚になってそれを引き受けなければ、他に誰が引き受けるというのですか？あなたですか？」

「聖座のためにやったのか？教会が女性を殺せと命じたのか？」

「魔女、呪術師、老婆、そして呪文使いは女性ではない。私は女性や子供を殺したりはしない。」

「君には何か問題があるようだ。」

男は首をかしげ、嬉しそうな驚きを装った。「ほう？ぜひ詳しく聞かせてください。」

「お前が彼女に囁く前に、舌を彼女の目に突っ込んでいるのを見たぞ」ラザルスは首を横に振った。「お前が彼女を魔女と呼ぶのは、彼女の服や靴を盗むためだけだと私は思う」

ラザロは漁師の顔が石のように固まるのを見ていた。突然、彼の怒鳴り声とともに、その顔は砕け散ったように見えた。「私のささやかな住まいにやって来て、私に助言しようとするな、空飛ぶ男よ！お前は私のことを何も知らない。私の忌まわしい正義の義務も、魔女の狡猾なやり方も知らない！」彼は服の山をちらりと見てから、皮剥ぎナイフに視線を向けた。男は目を細めてラザロの方を向いた。ラザロは漁師をこれ以上刺激しないように口をつぐんだ。男は外見上は太った顔を前に突き出した。

松明のぼんやりとした光の下、ハエの群れが渦巻く中、ラザロは彼の目を見つめた。彼の目はまるで内側に溶け込み、永遠に彼を見つめる巨大な球体のように見えた。男は唸った。「お前の心は丸見えだ。我々は全く違う。お前と私は。お前は他人の言葉を繰り返すことで賢いふりをしているだけだ。一方、私は賢いので、自分の言葉を語り、書き記すのだ。」男はリラックスしてニヤリと笑った。「今日、私の言うことを聞け。私はお前について、ああ、栄光あるラザロよ、正義と

真実の光の中で恥を感じ、知恵の影に怯える、気取った空飛ぶ男よ。私はあなたを完全に覆い隠し、あなたを裸にするだろう。

「世界だよ。」漁師はウィンクしてくすくす笑いながら、「私はあなたとは全く違って、人々の心を楽しませるための方法と手段の両方を持っているからね。」と付け加えた。

ラザロは顎を引き締め、深呼吸をしてから、聖書の言葉と鋭い観察眼で反論した。「知恵は神から来るものだ。お前は女の服を欲しがって殺人を犯したようだ。それに、彼女の目に何をしたのだ？」彼は首を横に振った。「いや、お前の心は神から来ていない。」

漁師は顔をしかめた。「神？ 誰の神だ？ お前の神か？」

「天におられる主なる全能の神はただお一人である。」

「そのような返答は予想していました。何しろ、あなたには守るべき信仰があるのですから。あなたの信仰の教師たちは、他の人々があなたの神に疑問を呈したとき、まさにそのように答えるように教えてきたはずです。しかしながら、あなたの信仰を守るために、私がすでに予見し、知恵の証言、理性の考察、あるいは逆の反論によって覆すことができる言葉以外に、あなたが書いたものや話したものを何一つ示すことはできません。ですから、特にあなた自身の信仰に照らして、私がおあなたに及ばないかもしれないところにわざわざ集まる苦痛は避けてください。」彼は首を傾げ、ラザロの返答を待ちながら微笑んだ。

「あなたは神の域に達していない。」

男は眉をひそめた。おそらく彼にもっと期待していたのだろう。

虫の絶え間ない羽音と、燃える松明のパチパチという音以外は、二人の間にしばしの静寂が訪れた。

ラザロは戸口の敷居の下の深紅の輝きをもう一度確認した。漁師が彼に呼びかけた。「お前は私がどうして大多数の人々とこれほどかけ離れた存在になったのか知りたいのだろう？ 私にはそれが分かる。もしお前がそれほど知りたいのなら、教えてやろう。」

どのようにしてそれが起こったのか。

ラザロは肩をすくめた。彼にとっては夜が来るのが待ち遠しかった。彼はうなずいた。「知りたいんだ。全部話してくれ。」

男はニヤリと笑って頷いた。「予想通りだ……よろしい。そうしよう。」

それは起こった。私の両親は海を隔てた異なる王国に属していた。しかしある日、二人がサルデーニャの海岸で貝殻を探していた時、二人の足跡が交差し、恋に落ちた。信仰は異なっていたが、二人は密かに結婚し、互いの信仰を軽んじたり、挑戦したりしないという誓いを立てた。二人の異例の結婚生活が一季節経った頃、私は生まれた。そして、私が彼らの子供である以上、二人は私にそれぞれの信仰を教えることに同意した。

それらはまるで似たような物語の二つの記録のように、一緒に属していた。私がそれらの違いを疑問に思う年齢になったとき、両親もまた誓った。父は私に沈黙を強要し、私の特異な信仰や両親の異なる信仰について、決して他人に話すことを禁じた。結局のところ、私たちは父の国の王国に住んでおり、賢者や部族の長老たちは、反対の宗教を表明することを禁じていたのだ。父は本当に善良な人で、母が長老たちに本当の信仰を告白すれば、自分の頭が刃の先になることを知っていながらも、母が密かに信仰を実践することを許していた。しかし、彼らの揺るぎない忠誠心によって、長老たちは何も知らなかった。そして時が経つにつれ、私は一人ではなく、七柱の神々を信仰するようになったのだ。」漁師はラザロの顔をじっと見つめた。

「七人か？」ラザルスは、まだ光り輝く敷居をもう一度ちらりと見ながら、わざとらしく頷いて尋ねた。「なぜ、そんなにたくさんの神々がいるのだ？」漁師は指を鳴らし、いたずらっぽい笑みを浮かべた。「そういう質問は予想していたよ。」

まるで目の前を閃光のように通り過ぎる既視感のように、ラザロは、その男が自慢話をするだろうと、そしてそのような質問をするだろうと、すでに予想していたことを思い出した。さらに、その男は夜になるまで自分のことばかり話し続けるかもしれないと、彼はなぜか知っていた。

「確かに。私は全部で七柱の神々を敬っていた」と男は言い、這い寄ってくる甲虫を見ながらブーツのつま先を上げた。「私の賢い父は六柱の神々に祈り、優しい母はたった一柱の神々に祈っていた。母の神々は、まさに君の神々であり、君は今それを唯一の神として守っているのだ。」男はブーツを下ろし、虫をはじけ、ラザロに微笑みかけた。そして身を乗り出し、「ほら、君の神については何でも知っている。それは私の神々のうちの一体に過ぎなかったのだ」と付け加えた。

「彼を受け入れるか、受け入れないか、どちらかです」とラザロは言った。「あなたはすでに彼を知っているのに、拒絶することを選んだのですから、私があなただを説得するためにできることはほとんどないでしょう。」ラザロは彼をじっと見つめ、「もしかしたら何かあるかもしれません」と尋ねた。それがあなたを神に背かせたのですか？

漁師はラザロを睨みつけた。それから彼は大きな声でむせ、痰を吐く瞬間を大げさに演出するかのよう咳払いをした。彼は痰を自分のそばに吐き出した。ブーツを履いてラザルスに鋭い視線を向けた。「私の話を最後まで聞かせてください」

くだらないことを言う前に、言葉を交わしなさい。

「許してください」とラザロは言った。

彼は再び咳払いをして、視線を和らげた。「ええ、まあ、母が父が他の女性と密かに交際していたことを知った時に、すべてが終わったんです。」彼は首を横に振った。

「私たち二人の間には、数えきれないほどの秘密があった。母は彼と同じくらい情熱的で、賢明だった。」彼はため息をついた。「母は激情に駆られ、彼が眠っている間に彼の剣を奪った。しかし彼は目を覚まし、眠りの混乱の中で、母の影を侵入者の影と勘違いし、彼女を殺してしまった。母はその場で息絶えた。母は彼に危害を加えるつもりはなかった。昇る太陽のように彼を崇拜していたのだから。」

「ご愁傷様です」とラザロは答え、敷居をちらりと見た。

「ああ、そうだろうとは思っていたよ」と男は皮肉たっぷりの口調で言った。「とはいえ、私は翌朝目覚めたが、何が起こったのか全く分からなかった。

ベッドに横たわり、暖かい日差し、小鳥のさえずり、緑の谷の濃い霧、そして多くの神々への感謝の祈りを捧げながら、私はまだはっきりと意識がはっきりしていた。隣の部屋で、亡くなった母と泣いている父が私のすぐそばに横たわっていることに気づかずに。」彼はラザロに向かって手を振って退けた。「ええ、あなたが私を哀れんでいることは知っています。でも、その必要はありませんよ、親切な方。」

ラザロはただ肩をすくめただけだった。

男は続けた。「人生で唯一の真の愛を失ったことに打ちひしがれた父は、その後まもなく自ら命を絶ちました。しかし、死ぬ前に、私に誓いを立てるよう要求しました。父の信仰を完全に捨て、母の信仰、すなわち唯一の主なる全能の神への信仰を受け入れるようにと。私は父に不満を抱き、拒否しました。すると父は泣き、そして息を引き取りました。私は一人ぼっちになり、七人の神々に囲まれていました。七人の神々は、たとえ夫婦であっても、互いへの尽きることのない愛から守ることはできないのです。」彼は身を乗り出し、再びラザロの顔を見つめた。

ラザルスはうなずいた。「七だ。」

「七本だ」と男は叫び、指を七本立てた。それから一度手を叩き、にやりと笑った。「それで私は両親をそれぞれ慣習に従って埋葬し、故郷を去る前に砂の中に九つの墓を残したのだ。」

「9人？」ラザロは思わず尋ねた。

漁師はニヤリと笑った。「まさにその通りだ。お前の神をあのに埋めたのだから。墓についても。」

ラザロは彼を叱責した。「彼は最初であり、最後である。そして、彼の言葉は決して滅びることはない。」

「私の記憶が鮮明に残っている限り、彼の墓は三番目だったはずだ。言葉はどうだろう？私は詩人、不死身だ。言葉の中では決して死ぬことはない。私の栄光あるラザロ、空飛ぶ男よ。」彼は指を鳴らし、秘密を囁くかのようにシューッと音を立てた。「たった一人でも耳を傾けてくれる魂がいる限り、私は言葉を囁き続ける。これが真実だ。私は私だ。」

二人の間の沈黙はほんの一瞬で、漁師の発作によって破られた。けたたましい笑い声が響き渡った。彼は床の石を何度も叩きつけ、太鼓の音に負けないように叫んだ。「さあ教えてくれ、空飛ぶ男ラザロよ！どちらが真の信仰で、どちらが偽りの信仰だったのか？急いでくれ！答えてくれ！賢者に答えてくれ！」

詩人が必要だ、さもなければ我々は皆死んでしまうだろう！

ラザロは立ち上がった。「やめろ！」

男は笑いながら彼を非難するように指差した。「やっぱりな！この世界における自分のちっぽけな存在を認めるのが苦痛なんだな。」彼はまだくすくす笑いながら首を振り、壁にもたれかかった。「ああ、彼らが正しいと信じたいと願うことについて、間違っている可能性を考えると、どれほどの悲しみを感じるのか。」

ああ、盲信に視覚と理性がもたらす疑念よ。」彼はまっすぐに

ラザルス。「君は、自分のことをあれこれ考えているうちに、何か落ち着かない気持ちを感じないのか？」

ラザロは再びしゃがみ込み、男の風雨にさらされた顔、そしてその目に視線を釘付けにした。彼は彼を叱責した。「偽りの信仰や、その預言者が数多く存在することは感じ取れる。しかし、全能の神への私の信仰こそが唯一の真の信仰であると私は知っている。」

「嘘だ！」男は床を叩きながら叫んだ。光るハエが飛び立った。彼は慌てて腕を組み、体をきつく抱きしめ、天井を見つめながら前後に揺れ、暗記しているかのように言葉を口にした。「神はいない。天国もない。地獄もない。天使も聖人もいないし、

「悪魔か魔物だ。」彼は何度も体を揺らし、上を見上げ、自分の考えに没頭しているように見せながら続けた。「奴らの痕跡はどこにもない。確認も、ヒントも、かけらもない。」

「嘘だ」とラザロはきっぱりと言い放ち、男の注意を自分に向けさせた。「聖書こそがその証拠だ。それは、お前のいと高き主であり救い主である方の御言葉なのに、お前はそれを否定しているのだ。」

男は依然として体を揺らしており、ラザロは彼の表情が急に変わるのを見た。その様子は瞬時に変化したようで、明らかに精神的に混乱した乱暴な人物の顔から、落ち着いた、気品のある高尚な態度の男の顔へと変わった。彼は顎を上げ、くちばしのような鼻でラザロを見下ろした。

「あなたが聖書と呼ぶものは、はるか昔に死んだ狂信的な書記たちが、後世の人々に自分たちの言葉を一つの言葉として、つまり彼らが思い描いた神と信仰の唯一の言葉として聞いてもらいたいと願って書き上げたものに過ぎない。実際、神々や悪魔は自ら書き記したことがないから、人間が神々や悪魔について書き記すのだ。」彼はラザロに指を突きつけ、うなずいた。「私がどうしてそんな偉大なことを知っているのか、不思議に思うかもしれないな。」

「不思議じゃないな」とラザロはぶつぶつ言いながら、もう一度ドアを確認した。

「では、お話ししましょう」と漁師は彼の言葉に気づかずに続けた。「私が幾度となく旅をしてきた中で、様々な土地や人々を訪れましたが、あなたの聖典のような書物に数多く出会いました。それらはすべて聖なる言葉だと謳っていました。」

そして神々の神聖な命令。私はそれらの様々な形を見てきました。羊皮紙、土器、石板や木板、木の幹に刻まれた彫刻、さらには、眠っている間に神によって苦痛なく刻まれたと主張する人々の顔や腹の傷跡や印まで。」彼は手を叩いた。「では、私がそれらの中で最も共通していると思われるものを知りたいと思いませんか？」

「私はそれを望んでいません」ラザロは言った。

しかし、その男は諦めなかった。「彼らの共通点は、神のメッセージとして何を伝えようとも、必ずそのメッセージの別の部分を読み上げることであり、神のメッセージは絶対的な真実であり、それに反する他の主張はすべて偽りであるということでした。では、あなたの聖典は、他の『神のメッセージ』と何が違うのでしょうか？

他の信仰や神々は、自分たちが現実のものにしようと努めているもの以外は非現実的だと宣言しているのだから、なぜ「神のメッセージ」と言えるのだろうか？ それは単なるもう一つの「神のメッセージ」に過ぎないのではないか？

数ある真実の中でも？ ぜひ教えてください。そこにはどんな真実があるのですか？ そして、どうして私の真実性を否定できるのですか？」彼はニヤリと笑ってウインクした。

最後にラザロは彼を叱責した。「真実は、あなたが主とその御言葉を受け入れていないということです。他の人々が受け入れも理解もできないことを疑うように、あなたも同じです。あなたの否定こそがあなたの破滅です。もしあなたが本当に主と御言葉を受け入れたなら、天の父なる神の御言葉であるならば、真理を語ると主張しながら、聖書を否定することはできないでしょう。この真理を否定することは、偽りによって罪を犯すことになりかねません。

「いや、私は嘘をつくこともできるし、実際にそうしたこともある」と漁師は反論した。「私は嘘をつかない。私は善良で正義感の強い人間だ。名誉ある人間と言ってもいいだろう。」

ラザロはテーブルの上の死体を見て首を横に振った。「いや、お前は悪人だ。善人を装っているだけだ。神と神の言葉に対する信仰の欠如以外に、お前は神に反論する良い手段を何も持っていない。」

ラザロは漁師の額を這うハエを見つけた。ハエはちょうど彼の眉毛の間に止まった。

男は額に虫が乗っていることに気づいていないようで、くすくす笑いながら答えた。「あなたの信仰を否定しても、私には何の得もありません。真理の不動の顔の前で、それを否定することで失うのはあなただけです。」彼は両手のひらを差し出し、肩をすくめた。「あなたは「ほら、真実を語る責任は君にあるんだ、私じゃない。私は神々が実在すると主張していないからね。」ラザロがハエが自分の顔の上を這い、顎鬚の中に潜り込むのを見守る中、彼は満面の笑みを浮かべた。

「神は実在する。神以外に神はいない。神は 私は 」とラザロは述べた。

「そうだって？ そうだって？」男は彼に問い詰めた。「もし私が、あなたの神がその背後にいると言ったらどうなる？」

「このドアを見てください」と男は、高くてぼろぼろのドアを指さしながら尋ねた。「信じてくれますか？」

「あなたの言うことを信じます。」

漁師は首を傾げ、眉をひそめた。「あなたの神が扉の向こうにいることを証明するのは私の責任なのに、なぜあなたは私を盲目的に信じるのですか？」

「もしかしたら、あなたは誰がその重荷を負うべきかを探しているから、真実が見えていないのかもしれませんがね？」

「では、よく考え込んだ様子で、彼は顎に指を当て、顎ひげに挟まっていたハエを追い払いながら言った。「私がドアを開けて自分の主張の真実を明かさなかったのに、どうして事前に私のことを信じてくれるだろうか？」

「そのような質問は予想していました」とラザロは答えた。「私には扉を開けてもらう必要はありません。」神の霊は至る所に、あらゆるものの中に宿っていることを知る。神はあの扉の向こうに、この壁の石の中に、屋根の梁の中にいるのだ。」「彼は顔についたハエを払い、死体の方に指を突きつけた。「彼はそこにいる彼女。」

ラザロが続けると、男はくすくす笑いながら首を振って彼をあしらった。「主なる神でなければ、誰が彼女を造ったというのですか？山や川、太陽や月を造ったのは誰ですか？あなたですか？」男は首を振った。「いいえ。全能の神が万物を造られたのです。聖書にそう書いてあります。ですから、戸を閉めて安心していてください。あなたの周りのすべてが神の存在の証なのですから。」

「そうは思わない」と男は言い返した。「君が提示できる唯一の証拠は、私の魚小屋が 魔女が ここにあるべきものがすべてここにあることを示すことだけだ。」彼は両手を空中に上げた。「だが、君はまだ私を納得させていない。君の神は、あなたが神の存在を望む以上の存在ではない。もちろん、あなたが願うなら魔女の目を通して、あるいは月の顔を通して、私に神を現してくださるなら。どうかお見せください。そうすれば、私は心から感謝の念に打たれるでしょう。」

ラザロは、漁師が身を乗り出し、魚小屋の床越しに自分の皮剥ぎナイフの方をちらりと見るのを見ていた。

「そして、お前にはその座ったままでいてほしい」とラザロは唸った。男は壁にもたれかかり、ため息をついた。「答えてくれ。もし石も木材も魔女も山も太陽さえもなかったら 何もなかったら どうやってあなたはそれでもなお、自分の神の存在を信じられますか？」

「もし何も存在しなかったら、私も無であり、何も知ることはできないだろう。」しかし、私が私である以上、私は神も存在すると知っている。なぜなら、私は自分自身を創造したわけではないからだ。

男は顎を食いしばり、ラザロの返答を考えた。しばしの沈黙が流れた。

最後に、その男は尋ねた。「なぜあなたは偉大な創造主を、単なる神、王、あるいは父と呼ぶことで、その偉大さを矮小化するのですか？」

「偉大なる創造主？つまり、『全能の神』のことですか？」

「いいえ。私は全能の神とは言っていません。王、主、神々の公爵とも言っていません。私は善の神とか悪の神とか言うのではなく、偉大なる創造主と呼んだ。偉大なる創造主には、輝かしい名前も高貴な称号も必要ない。

「全能の神は多くの名前と呼ばれる。そして、あなた方は神を『偉大なる創造主』と呼ぶことで、また別の名前を与えているのだ。」

「やはりそうだったか。』彼はため息をつき、硬直した指で自分の脚を軽く叩きながらラザロに説教を始めた。「私が旅したあらゆる場所で、出会ったあらゆる男たち、神に忠誠を誓った男たちは皆、今お前が言っているのと同じように、自分の神は偉大なる創造主だと宣言した。だが、偉大なる創造主は人間の神ではない。偉大なる創造主は人間を創造し、この世界に驚嘆させ、それぞれの神を信じるようにしたのだ。よく理解しろ、ラザロと名乗る、我が栄光に満ちた空飛ぶ男よ。」

「神は真理である。冒涇に直面しても、神を弁護する必要はない。」

漁師は顔をしかめた後、くすくす笑った。「神は真理だ？それだけか？それだけか？それ以上でもそれ以下でもないのか？」彼は大声で笑った。「まあ、もちろんそう言うこともできるだろう。自分の神を擁護するなら、どんな人間でも自分の神は真理だと言うだろう。結局のところ、偽りの神を信じるなどと愚かなことを言う人間などいるだろうか？」彼はくすくす笑った。「君は何も言わなかったと同時に多くのことを言った。自分の神を擁護する意味のあることは何も言わなかったが、最も単純な主張でさえまともに弁護できない自分の無能さを露呈したのだ。」

「私は彼を擁護しているのではなく、ただ彼の真理を伝えているだけだと申し上げました」とラザロは述べた。

「ほう？」男は身を乗り出した。「では、この真実を教えてください。偉大なる創造主は善なのか、悪なのか？」

「もしあなたが神について語るなら、神は善い方である。」

「嘘だ！偉大なる創造主こそが全てだ！全てのものは偉大なる創造主のものだ。善なるものも悪なるものも、花から魔女まで。全てが！半分の真実しか語らないのに、どうして真実を語っていると言えるんだ？それに、悪は悪魔や魔物からしか生まれないと信じているんだらうな？」彼は微笑みながら頷いた。

「では、これらの邪悪なものは一体どこから来たのか？彼ら自身からか？そんな子供じみた話を聞かせてくれ！」

「あなたは私が教えなくても、神の言葉を知っているようだ」とラザロは言った。

「なぜあなたは私に真実を語るよう求めながら、それを否定するのですか？」

漁師は肩をすくめた。「もし私が、あなたの信念のあらゆる問題点を一息で説明したとしたら、あなたは手を振るだけでそれらの問題をすべて片付けてしまうかもしれません。私はあなたの誤った考えの多くの側面を鋭敏に指摘するために、これほど多くの時間と労力を費やすつもりはありません。あなたが『信じない』とか『そんなはずはない』といった、古風でたわごとのような反論をするだけでは、私は満足しません。ですから、あなたの注意と積極的な参加がどうしても必要なのです。私の栄光あるラザロ・ゴグ、イワン・ゴグの息子よ、真理を探求するこのような有益な対話に参加してみませんか？」

ラザロは首を横に振った。そして男を睨みつけた。「いや、そうは思わない。」

「少しもそう思わないのか？ 犬歯だらけの口は沈黙を求めているようだが、目は違うことを言っている。その目には、抑えきれない好奇心と、あなたを悩ませる数々の疑問への答えを求める渴望が見える。」

「そして、おそらくあなたは、見たいもの、聞きたいものだけを見聞きしているのでしょうか、我が同じく輝かしいアマド・ガストンよ、バラバス・ガストンの息子よ？」

漁師は笑ってラザロに指を突きつけた。「君は頭の回転が速いね！」

素晴らしい発言ですね！ では、おそらく私たち二人は、先見の明において似たような過ちを犯しているのでしょうか。あなたは、

あなたの信仰の根本的な間違いが分からないこと、そして私

「お前のまだ飢えた瞳の中に、私が見てはならないものが見えているのだ。」男が続けると、ラザロは歯を食いしばった。「さて、我が翼ある者よ、私は賢明で、またその気もあるのだから、人間とその神々の真実を、お前と分かち合おう。」

「どうしてもそうしなければならないのか？」ラザラスはぶつぶつ言いながら、後ろのドアをちらりと調べた。漁師もまた、失くしたナイフをもう一度ちらりと見た。

「確かに」と男は断言した。「それはこうだ。子供が親のそばで慰められるように、親もまた神々に慰めを見出す。子供が親に導き、確信、慈悲を懇願するように、親もまた神々に導き、守り、恵みを祈る。結局のところ、親も子供だった頃は、無垢さ、恐れ、愚かさに苦しんだのだ。」

ここまでで私の言いたいことがお分かりいただけましたか？

ラザロは彼の言葉の意味を理解したものの、返事をする事はなかった。目の前の奇妙で、いや、幻想的とも言える光景の、あまりにも不釣り合いなことにすっかり心を奪われていたからだ。彼は魅了されたように漁師を見つめていた。漁師は鋭い洞察力と冷静な考察力を発揮し、つい先ほどまで講義をし、裸にして、その目を舐めていた死体の後ろから、今度は彼に講義を始めたのだ。

「あなたの沈黙によって、私はあなたが私を集めるために集まったのです」と漁師はラザロの注意を引いて言った。「今、私はあなたにさらに大きな真理を授けましょう。それは、あなたの信仰ゆえに必ず否定するであろう真理です。それは、偉大なる創造主はすべてであるということです。そして、すべてであるゆえに、私たちに慰めや安らぎを与えるための馴染みのある顔はなく、私たちに確信や保護を与えるための父のような手はなく、私たちに慰めたり、苦痛を癒したりするための母のような舌もありません。」彼はラザロに指を突きつけた。「これで、神々についての書物や物語が存在する理由がわかったでしょう。人々は儀式的に神々について書き記し、語り合うことで、神々が存在することを集団的に確信しようとしているのです。そして、大切にしている聖典のページや、歌うような説教の言葉の中で、神々に顔、形、そして名前を与えているのです。そして、あなた方の神を信じる者たちと同じように、神を『父なる神、主なる神、王なる神』と呼び、『怒り、慈悲、悲しみ、恵み』といった特質を与えています。まるで、自分たちの姿に似せて神を創造したかのように。」漁師はにやりと笑った。「さて、栄光あるラザロよ、私に教えてください。もし豚が自分自身や広大な世界に驚嘆することができ、人間と全く同じ能力を持っているのなら、豚もまた、自分たちの姿に似せた神々について書き記し、語り合うのではないのでしょうか？」

「もしあなたの心が神と共にあるなら、豚にはできないようなことを不思議に思うべきではないと私は思います」とラザロは言った。

「もしあなたが、無能な豚のように、存在しないものに何一つ驚かないのなら、どうして無能なあなた自身のように、存在するものを完全に理解できるというのか？」と男は皮肉たっぷりに問いかけた。

ラザロは顎を食いしばった。「私は神の敵の前で神を弁護する必要はありません。そして私自身、信仰と理解力において、あなたには同じような能力がないことを十分理解できると信じています。」

漁師はシューッと笑い、手を振って彼を追い払った。「ああ、だが、私もお前と同じように、自分の能力と偉大なる創造主を信じており、無慈悲で邪悪な世界という痛ましい真実から目を背けさせる愚かな考えと盲信を持っているのだ。」彼は肩をすくめた。「皆そうしている。お前と同じように、より良い場所と、人生の多くの苦悩を慰めてくれる慈悲深い神々を信じることを選んでいるのだ。」男はうなだれて頭を振り、大きくため息をついた。

「しかし悲しいことに、彼らは残酷な世界に留まり、彼らの神々は、形も顔もない偉大なる創造主に馴染みのある顔を与えようとする、ただの必死の試みに過ぎないのです。」彼は声を詰まらせ、咳払いをして付け加えた。「より良い場所を夢見る彼らは、偉大なる創造主が創造した世界を見ようとしないのです。」ラザロが首を傾げると、男は目を覆い、泣き出しそうになった。

男が床に手を叩きつけ、大声で笑い出したので、ラザロはびくっとした。「なんて哀れな獣どもだ！」と男は叫んだ。「奴らの神々は、偉大なる創造主の姿とは似ても似つかない、取るに足らない人形の頭の像にすぎない！」男は再び笑った。「しかも、奴らは自分たちの神が偉大なる創造主だと主張するだけでなく、多くの者が、偉大なる創造主が女に種を植え付け、人神を生んだとまで誓っているのだ！」男はくすくす笑い、首を振った。「すべての神々の中で、
「愚かな考えだ。人間神を崇拜し、そして殺したのだ。」彼の表情は突然、思索にふけるような表情に変わった。彼はラザロをじっと見つめ、顎鬚を搔いた。「そんな愚かなことを本当に信じられるのか？」そう言って彼はウィンクし、ニヤリと笑った。

渦巻く松明の炎の下、そして男の冷たい視線の中で、ラザロは彼は、かつて母親の目から発せられていたのと同じ、燃えるような冷酷な視線、そしてその内に燃え盛る同じ無情な情熱を発見した。彼は漁師に聖書の一節を引用して反論した。「神は、そのひとり子である御子を与えられたほどに、世を愛された。それは、御子を信じる者が一人も滅びることなく、永遠の命を得るためである。」

男は芝居がかった仕草で片手を高く空に突き上げ、もう一方の手で胸を押さえながら、「聞け！お前の言葉はまさに私の心に突き刺さる短剣だ、私をこんなにも傷つけるとは！よく準備したな」と嘲るように叫び、「実に予想外で、実に新鮮な言葉だ！お前の知恵は」

ラザロが姿勢を変え、皮剥ぎの刃に目をやると、男は両腕をだらりと垂らし、便秘気味の表情でラザロの方を向き、「誰からその言葉を借りたのか知らないが、その人に返して、その言葉は空虚で知恵がないと伝えるべきだ」と付け加えた。

彼は指を鳴らし、ラザロを指差した。「さらに、彼にこう言うべきだ。」

「あいつは二重に愚か者だ。まず、その言葉を真実だと信じたこと。そして、お前に対してしたのと同じように、私に対しても傲慢で説教臭い愚か者のように振る舞うようお前を説得したこと。」漁師は体をきつく抱きしめ、背中を壁に押し付け、硬直した無表情でラザロを見つめていた。

ラザロは自分の急激な体調の変化について考えた。これまでの人生で、今彼を熱くさせているような激しい憤りを感じたのは、たった3回しか思い出せなかった。彼は、隊長が父親を殺した時の怒りの閃きを思い出した。瞳孔が収縮した。彼は、自分を弱体化させる裸の母親を思い出した。

彼の信仰と翼のある怪物で彼を殺そうとする試み 彼は拳を握りしめ、

ヒューゴンの兵士たちが彼を翼を持つ怪物だと非難する囁きを思い浮かべると、ラザロは顎を食いしばった。目の前にいる、明らかに有能な男が怪物のように振る舞い、彼の信仰の根幹を嘲笑っているのを見て、ラザロの硬い顔の輪郭に一筋の汗が浮かんだ。彼は深く息を吸い込み、自分の心の支えの礎を、そして自分が父親に似ていて、怪物のような母親とは全く似ていないという確信を、あえて崩そうとする男を睨みつけた。

「母とは似ても似つかない 真の怪物なんかじゃない」と彼は自分を慰め、ため息をつき、どこか風変わりな笑みを浮かべながら答えた。「君が言うように、私は誰かからその言葉を借りたわけではない。それは聖書にある神の言葉だ。君は聖書を知っていると主張していたのに、神の言葉が啓示された時に思い出せないようだから、もしかしたら嘘をついていたのではないか？」

漁師は同じように古風な笑みを返した。「私は嘘をつきません。そして、もしよろしければ、私が名誉ある人間であり、しかも博識であることを思い出してください。私はあなたの聖典を、その書物全体にわたって、一語一句、一節一節すべて覚えています。」

しかし、あなたがそのような能力は普通の人間には到底及ばないものだとお考えになるかもしれませんが、私はそのような人間ではありません。彼は咳払いをして再び微笑んだ。「では、どうか教えてください、私の栄光あるラザロよ、夜空を飛ぶ黒い服を着たキリスト教徒よ。」

あなたも書記をされるのですか？

「私は書記です」とラザロは答えた。「しかし、あなたが主張するように、聖書のすべての節のすべての言葉を知っているのなら、列王記下17章35節を暗唱してみてくださいはどうか？」

漁師は顔をしかめて唇を歪めた。「私の能力を試すために、その詩を選んだとは、なかなか賢いですね。とはいえ、あなたの挑戦を受け入れ、

「同じように実演してください。」彼は息を吸い込み、詩を早口で読み上げた。「あなたがたは他の神々を恐れず、またそれらにひれ伏さず、それらに仕えず、それらにいけにえを捧げない。」男は一度手を叩き、「これで分かりましたね。」と付け加えた。

さて、もう一度申し上げますが、私は偉大なる創造主のみを信じており、あなた方の神々のような神々は崇拝しておりません。」彼はラザロの方を指さした。「今度はあなたの番です。箴言8章1節について教えてください。どのように書かれていますか？」

ラザロはそれを声に出して思い出し、「知恵は呼びかけないのか？理解は呼びかけないのか？」と言った。

彼女の声を発する？

「ああ！」男は眉をひそめて叫んだ。「もしかしたら、君にはまだ知られていない一面があるのかもしれないな？」

ラザロはうなずいた。「もしかしたら、私が自分の能力を自慢する必要がないことに気付いたのかもしれませんがね？とはいえ、あなたがしつこく尋ねるので、あなたもそうでしょうが、私は聖書のすべての節のすべての言葉を知っていますよ、アマド・ガストン。漁師であり詩人、バラバス・ガストンの息子よ。」

男は片方の眉と同じく、もう片方の眉も上げた。「君にもその才能があるのか？ 記憶を一切乱さないという才能が？」

「もしそれがあなたの言葉の意味であるならば、私はそれを見聞きしたことを覚えている」とラザロは述べた。

「一度見たり聞いたりしただけで、それを永遠に記憶にとどめるものってあるのだろうか？」

「今のところはね」とラザロは冷たく答え、こう付け加えた。「だが、私は永遠に生きてきたわけではない。あなたはそうなのか？」

男は額を叩き、天井に向かって話しながら明らかに動揺していた。「

私の人生で、私のような人に会ったことは一度もない！しかも、この人は翼を持っている！なんてことだ

「偉大なる創造主が、私たちを壮大な計画に基づいて創造されたのだ！」彼はラザロに嬉しそうな視線を向け、「もしかしたら、私が最初に思っていたよりも、あなたと私は似ているのかもしれない！」と言った。

ラザロは二人の間に置かれた死体に目をやった。「我々は全く似ていない。」

「いや、私たちは同じだ」と男は言い張り、手を振った。「君も私も同じ設計図を持っている。同じように才能を与えられ、同じように呪われている。つまり、自分自身を完全に自覚しているのだ。」彼は椅子に深く腰掛け、目を細めてからラザロに尋ねた。「君は自分の聖典の同じ節を何回読み返したんだ？」

「聖書は神の言葉であって、神の書物ではない」とラザロは答えた。

「そして私も同じ聖句を何度も読みました。あなたもそうすべきです。」

男は顔をしかめた。「では、なぜあなたは既に読んだものをもう一度読むのですか？あなたの記憶が、あなたが主張するほど確かなものではないかもしれないからではないですか？」

「神の言葉を覚えているからといって、私がそれを完全に理解しているわけではありません」とラザロは述べた。

「読むたびに新しい意味が見つかるんだ。」それから彼は身を乗り出し、ラザルスは拳を床に突きつけ、「たとえ完全に記憶をたどったとしても、思い出した物事にすべての意味が与えられるわけではない」と結論づけた。

男は壁にもたれかかり、ニヤリと笑い、指の関節を鳴らし始めた。「記憶だけでは理解できないので、あなたの言うことは正しいのかもしれませんが、しかし、言葉を『理解する』ような議論を私たち二人の間で交わした記憶はありません。」彼は眉を上げ、うなずいた。「しかし、あなたが私たちを木の根源、つまり書かれた言葉の意味そのものにまで連れて行ってくれるのであれば、書かれたものの意味を測る方法は、そこに書かれていること以外にもたくさんあるということ、あなたにお伝えしておきましょう。」男は首を振った。

ラザロを指さして、くすくす笑った。「あなたは、その聖典の意味をより深く理解するために、何度も何度も読み返したと主張している。では、こう答えてみよ。聖句に含まれていない言葉や概念によって、その意味を一度でも考えたことがあるか？聖句に書かれていないことすべてによって、その意味を吟味したことがあるか？言葉や概念の慎重な選択、そしてそれらの繰り返しによって、これらの聖句からより多くの意味を見出したことがあるか？それとも、聖句のページを読むことにすっかり夢中になりすぎて、その聖典の真の意味を見失ってしまったのか？」

「わたしはあなたがたの聖書を読んで、そこに書かれていないことを学ぶわけではありません。鳥について読んで、パンやぶどう酒の作り方を学ぶのと同じことです。あなたがたは語るが、何も語っていない。」

「ああ、私は読んでいますよ。聞いているのは君の方だ、何も聞いていないくせに。ラザロ、君は一体いくつの書物を読んだんだい？」

"多くの。"

男は明らかに考え込むようにうなずいた。「たくさん？では教えてくれ、これらの文書のうち、神の教えを説いたものはいくつあった？君が今真実として受け入れている聖典以外の、異なる神々や信仰について述べたものはいくつあった？」

「私はあなた方のように、多くの神々や概念、そしてナンセンスを受け入れるような人間ではない。神はただ一人、言葉もただ一つ、真理もただ一つ。嘘を読む必要などないのだ。」

「そして、私はそのような返答を予想していました。とはいえ、あなたが絶対に聞き入れようとしないであろう考えを、あえてお伝えしましょう。それはこうです。人は皆生まれるように、必ず死ぬ。そして、誰も死を望まない 誰もが永遠に生きたいと願う ゆえに、人は自らの死を考える苦痛から逃れるための手段を編み出してきたのです。あなたはこの真実をどう思いますか？」

「もしかしたら、静かに自分の死について思いを巡らす方法を見つけられるかもしれないね？」ラザルスはそう言いながら、ドアの敷居の微かな光をもう一度確認した。

漁師はくすくす笑いながら続けた。「どんな信仰を持つ人でも、あなたのデバイスはあなた方の神聖な書物こそが、あなた方の手段であり、あなた方の道しるべは、その書物に記された規則です。私がこれまで出会ってきた様々な信仰の中で、共通する理解を見いだしました。それらすべての中核には、神によって創造されたと主張する聖なる碑文があります。そして、これらの碑文や神聖な書物の中には、規則が記されています。その規則は信仰や民族によって異なりますが、私はそれらの類似点を見出し、それらはごくありふれたものであると気づきました。それらに共通する唯一の規則をお聞きになりたいですか？」

ラザロは顔についたハエを払い除け、アマドを追い払うと、目の前の床に集まっている数匹のゴキブリに目を向けた。ゴキブリたちは頭に生えた長い毛のペアで互いに自己紹介をしているようだった。

男は続けた。「それらすべてに共通する唯一のルールはこうだ。もし人が自分の信仰の神聖な碑文を真実と受け入れ、その規則に従うならば、彼は永遠に幸福と平和の中で生きるだろう。そしてもし人が碑文を真実として受け入れないならば、彼もまた永遠に生きるだろうが、悲しみと苦痛の中で生きるだろう。」彼はくすくす笑った。「何だって？」

それは、他の神聖な碑文と同じ光の下で、あなた自身の聖典について何を物語っているのでしょうか？また、あらゆる信仰の碑文が、自らを神聖なものだと主張する場合、それは何を物語っているのでしょうか？

ラザロは首を振った。「君には、まだ知られていない何かがあるのかもしれない。」

おそらく、あなたが示さないことこそが、あなた自身を最もよく表しているのでしょう。私はあなたに尋ねます。あなたが目撃したすべての信仰、そしてあなたが読んだすべての言葉の中で、あなたがここで犯した悪行を称賛する宣言を一つも見つきましたか？彼は死体を指差しました。「あなたが知っている」と主張するすべての信仰の中で、あなたの殺人行為を善あるいは正義であると宣言するものはどれですか？」

男はにやりと笑い、身を乗り出して答えた。「君自身のラザロだよ。」

「いいえ、私の物ではありません。それでもあなたは嘘をついていないと主張するのですか？」

「私が嘘をつかないことを覚えておいてください。あなたが真実を誤解しているからといって、私が嘘をついているわけではありません。それは単に、あなたが真実だと信じているものの向こう側を見なければならぬという意味です。」

「殺してはならない。盗んではならない。」聖書の言葉以上に偉大な真理はない。神の。」

男は後ろにもたれかかり、うなずいた。「ずっと前から、あなたがそう言うだろうと思っていました。そして、あなたの主張に答えるための質問を用意していました。では、お尋ねします。もしあなたは鋭い洞察力を持っていたからこそ、自分の信仰の悪魔を倒し、世界から悪を浄化する方法を知っていたのなら、あなたは自分の悪魔を倒すだろうか？」

ラザロは目を細めた。「お前たちがこの場所で何をしているか知っているぞ。女を殺して服を奪っているんだな。」

「もう一つ質問があります」と男は続けた。「もしあなたが自分の悪魔の力を盗み出し、それを密かに埋めて、この世から永遠に消し去る手段を持っていたとしたら、あなたは自分の悪魔から盗むでしょうか？」

ラザロの脳裏には、巨大な空飛ぶ豚の記憶がよぎった。彼はこう答えた。「悪魔は神の前に立ち、あらゆる悪行について裁きを受けるだろう。私は神ではない。起こり得ないことを不思議に思う必要はない。それに、あなたがそんなことを不思議に思うのは、何かおかしいと思うよ。」

男は彼を叱責した。「あなたの信仰には何か問題があるようで、それがあなたを信仰の外へと迷わせているのだ。とはいえ、たとえ世界を救うためであっても、あなたが自分の悪魔を倒そうとはしないでだろうと私は予想していた。結局のところ、あなたの信仰は、自分自身から自分を救うことに最も警戒するように教えているのだから。」

ラザロは首を横に振った。「神は独り子を」

「おっしゃる通りです！」と男は叫んだ。「しかし、私たちは命を与えることについては話しませんが、彼らを奪ったのだ！もしあなた方の聖典に、人間があなた方の人神の命を奪ったと書かれていなかったなら、あなた方の同じ聖典に、あなた方の神が自らの命を奪ったという考えが書かれることはなかったでしょう？」

キリストを十字架につけた者たちは、神のような存在ではなかった、アマド。彼らは、最終的にどんな代償を払おうとも、神に許されたことだけを行ったのだ。

「その通りだ、ラザロ。お前は信仰に忠実に、私を追い詰めるほどの真実を語った。予想通りだ。」漁師は死体の方に手を差し出し、こう付け加えた。「偉大なる創造主は、より多くの命を救うために、私に少数の命を奪う能力を与えてくださった。今、お前に問う。悪に対してのみ行われる悪行は、善行ではないと言えるだろうか？」

ラザロは眉を上げた。「殺すことは、救うことではない。」

「魔女を殺せば世界は救われる」と男は目を細めて非難した。「もし魔女を生かしておけば、死と腐敗と不吉な前兆という邪悪な種を地上の善良な人々にばらまき続けるだろう。」

ラザロは、死んでいてほとんど特徴のない女性を見てから、「どうして彼女が魔女だと確信できるのですか？」と尋ねた。

男は、ラザロがあのような質問をした厚かましさに明らかに驚き、鼻を鳴らした。

彼は続けてこう問いかけた。「熟練の鍛冶屋が馬を見分ける術はあるのか？大祭司が悪の兆候や印を見分ける術はあるのか？」彼はラザロに唸り声をあげた。「私の知恵に異議を唱えるな。私は経験豊富で熟練した魔女狩り師だ。お前は魔女や老婆の手口や行動について何も知らないのだ！」

「おっしゃる通りです」とラザロは同意した。「確かに私は彼女たちのことをほとんど知りません。だからこそ、あなたにそのような証拠を求めているのです。」彼は横たわっている死体の方を指さした。「この女性、あるいは他の誰かが魔女であるという証拠を提示できますか？」

男はラザロを睨みつけながらこう認めた。「魔女狩りは正確な方法ではない、我が輝かしく好奇心旺盛な翼を持つ者よ。不完全なやり方から絶対的な証拠を引き出すことはできない。お前の単純な信仰とは異なり、偉大なる創造主の世界は、お前が想像するほど規則正しく単純なものではない。複雑さ、入り組んだ様相、そして多くの曖昧な部分に満ちているのだ。」

ラザロはうなずいた。「では、あなたの複雑な返答は、あなたが彼女が魔女であるという証拠がない、あるいは、単純な真実を覆い隠そうとして「複雑さ」や「グレーゾーン」について私に言及するかもしれないが、

「そのような証拠はありません。」彼は身を乗り出し、さらに男を問い詰めた。「あなたは犠牲者たちが魔女であることを証明できないと私は信じています。それどころか、あなたは彼女たちの服や靴を欲しがって初めて、彼女たちを魔女だと見なすのだと思います。」彼は折り畳まれたドレスが置かれた作業台を指さした。「そうでなければ、なぜそんなに丁寧にそれらを配置するのでしょうか？」

「嘘だ！」漁師は床を叩きながら叫んだ。「私は自分のためではなく、あなたのため、皆のためにやっているんだ！」男は怒って人差し指を振り回した。「あなたは単純な目で、昼か夜しか見ず、夕暮れや夜明けには注意を払わない！」

「君たちは、物事を善悪どちらかに分類するだけで、その意味や、善悪の度合いを測ろうとしない！」彼は再び床を叩いた。

「よくもまあ、私の行動の証拠をちらりと見ただけで、その意味も方法もまだあなたには分からないのに、私の意図をわきまえていると思ひ込むものだ。よくもまあ、私を裁くものだ！」

ラザロは唇をすぼめ、眉を上げた。そして冷やかに答えた。「私の目は鈍いのもかもしれない。だが、私の鈍い目でもはっきりと分かる。あなたは、自分が裁きを下し、自らの手で死刑を宣告した者たちから奪った服や靴を身にまとっているのだ。」彼は大きくため息をついた。「そしてあなたは、これを自分のためではなく、私のため、そして皆のために行っていると言う。どうしてそんなことがあり得るのか？」

男は鼻で笑って言った。「なぜお前は魔女についてそんなに何も知らないのか、分かっているのか？」

「私は魔女を見たことも聞いたこともない。聖書に書かれている以外には。」とラザロは答えた。

「その通り！私のような忠実な魔女狩り師がこの世から魔女を一掃しているから、あなたは魔女を見たことがないのです。そして、この正義の営みに携わっているのは私だけではありません。あなたの教会の聖職者たちでさえ、魔女を探し出して滅ぼすことで、世界をより良くしようと努めています。魔女の悪は触れるものすべてに蔓延します。私たちはやらなければならないことをやっているのです。魔女狩り師は自分の任務を楽しんでいるわけではありません。ただ、正しいことをしているだけなのです。」

ラザロは作業台と死んだ女の間をちらりと見た。

「魔女狩り人が魔女の悪を世界から取り除こうと努力し、魔女が触れるものすべてに悪を広めるならば、なぜ魔女狩り人が魔女の服や靴を欲しがらるのだろうか？そして魔女狩り人は

魔女を殺そうとするあまり、あれほど頻繁に魔女に手をかけるのに、彼はますます邪悪になっていくのではないか？

「なぜそんなに服や靴にこだわるんだ？聞いてくれよ！」漁師は怒鳴った。「服と靴 靴と服だと！魔女の話をしているんだぞ。お前はどうかしているのか？自分のことしか考えられないのか？」

「できるよ。」

「では、ぜひとも私にそれを授けてください」と男は叫んだ。

ラザロは挑戦を考えてうなずいた。彼は死んだ女を指さした。彼らに「まず、この女性の名前を覚えていますか？」と尋ねた。

「魔女だろうが、老婆だろうが、醜い女だろうが、どれも同じくらいふさわしい名前だ」と男は言い放った。ラザルスは肩をすくめた。「おそらく、全身ローブをまとったアマド・ガストンでしょう。彼はバラバスの息子です。」ガストンは、彼女が名前も裸であることを望んでいる、そうだろうか？

ラザロが話を続けると、男は彼を睨みつけた。「しかし、もしこの女が突然息を吹き返して生き返り、自分が知っていることをすべて正直に話すように言われたとして、私が『死んで裸の魔女は、死んで服を着た魔女より劣っている』と尋ねたら、彼女はどうか答えるだろうか？」

「生き返るはずがない！魔女からは嘘しか出てこない！」男はうなり声を上げ、慌てて立ち上がった。「お前は何者だ？私の魚小屋に忍び込み、魔女たちとつるんで私を嘲笑するとは！」

ラザロは素早く立ち上がり、数歩前に進んだ。「そこに立ち続けろ！」

男は皮剥ぎの刃から目を離し、ラザロにこう言った。「もし私が「違うのか？どうするつもりだ？私を殺すのか？」彼はニヤリと笑った。「お前を縛る掟を覚えているぞ 汝は」

ラザロは翼を少し広げ、口を開けて、かすかにシューツと音を立てたので、男は自分の歯の全長を見ることができた。

男はゆっくりと後ろに下がり、壁にもたれかかった。「君には見かけ以上の何かがあるのかもしれないね。今度は私を惑わせようとしているのか？」彼は

彼はこめかみに指を当て、明らかに苦痛に顔を歪めて目を細めた。「奴らと同じように、お前は私の心に邪悪な考えを植え付けようとしている。」彼は顔をこすり、深呼吸をしてから弱々しい笑みを浮かべた。「だが、お前の邪悪な力は、熟練の魔女狩り師である我が栄光のラザロには通用しない。」

「あなたの思考は、その中に潜む悪とともに、あなただけのものです。」

自らを破滅させるのは、他ならぬあなた自身だ。

「黙れ」男は片手を離さずに吐き捨てるように言い、目を大きく見開いて壁を見回した。「聞け、聞け！」

「私たちは何に耳を傾けるべきなのか？」

「シーッ！ドアの向こうから聞こえるぞ！」彼は片手で頭を抱えながら、背の高いぼろぼろのドアを指差して叫んだ。

「また、奴らは呪文を囁いている。身を隠せ！急げ、勇敢な飛行士よ！」男は意味不明な言葉を口走りながら、自分の体のあちこちを指で叩いていた。しかし、十字架の印としてわざと十字を切るであろう司祭とは異なり、漁師は額、肋骨、目、膝、舌など、あらゆる場所を無秩序に触っていた。

「何をしているんだ？」ラザロは首を傾げて尋ねた。

「ラザロよ、身を守れ！邪悪な魔女たちの企み、あの悪意に満ちた策略に直面した時、自分の考えに気をつけろ！純粋な考えだけを心に留めよ、さもないと内側から破滅してしまうぞ！」

ラザロは、高くぼろぼろの扉と、彼が見つけた漁師の間をちらちらと見ていた。彼は完全に自分自身に没頭し、唇を震わせながら、未知の言語での祈りの朗唱にも似た、聞き取れない言葉をぶつぶつと呟き、自分の体の目立つ部分すべてに触れようと決意しているようだった。

「心を落ち着かせなさい」と男はラザロに助言した。彼は自分の体を触るのをやめ、身構えた。彼は両手を壁につけ、身を乗り出し、深くゆっくりと呼吸しながらラザルスに説教した。「内なる力を集めよ。それが魔女狩りのやり方だ。悪に立ち向かう時、真実の剣のように、打ち砕かれた金属のように、自らを鍛え上げよ。」

ラザロは後ろを振り返り、外の扉を見たが、そこからはもう光は差し込んでいなかった。敷居を越えた ついに夜が訪れた。それから彼は、テーブルに置かれた死体と、高くぼろぼろになった扉を振り返り、再び漁師に視線を戻した。漁師は壁にもたれかかり、くつろいだ様子で微笑みながら彼の方を向いていた。

「彼らは私たちに危害を加えることはできない」と彼はラザロに断言した。「私たちは今、偉大なる創造主の強大な鎧の下で完全に守られているのだから。」

「死者からの保護ですか？」ラザロは信じられないといった様子で尋ねた。

男は力強く首を横に振り、耳をぼろぼろの扉の方に当て、ラザロに聞くようにと激しく囁いた。「ああ、奴らは死んでいない、我が弟子よ。死んだふりをしているだけだ。もしお前が私のような熟練の魔女狩り師になりたいのなら、魔女の様々な手口を知っておかなければならない。これはお前が学ぶべき多くの教訓の最初のものだ。さあ、よく聞け。その大きな耳を使って、アンデッドについてよく知るのだ。」

ラザロは耳をぴくりと動かし、高い扉の向こうから物音がしないか耳を澄ませた。

「ああ、確かに」と、にやりと笑う漁師は言い張った。「彼らが邪悪な秘密を囁き合っているのがはっきりと聞こえるだろう。」彼は裸の死体を指さし、「首がまだ切断されているこの女こそ、邪悪な姉妹たちを我々に差し向けることができるのだ。」

ラザロは漁師を注意深く見守っていたが、彼の心は耳にありました。すると、背の高いぼろぼろの扉の向こうから、多くの女たちのささやき声が聞こえてきた。彼は数歩進み、その音が次第にはっきりと聞こえるようになると、さらに注意深く耳を澄ませた。そして、くぐもったような低い音の中に、ささやき声が断片的なフレーズとして、そしておそらくは、ささやく魔女たちとおしゃべりな老婆たちの重なり合う会話として、聞き取ったのだ。

ラザロは顔を赤らめて不思議そうな顔を漁師の方に向けた。はにやにやと笑い、ラザロが背の高い扉の向こうから突然手に入れたかもしれない新たな証拠に、まるで喜んでいるかのようなようだった。そして実際、ラザロの心は、最近の記憶、その男の名誉、真実、知恵、完璧な記憶力、巧みな弁舌、細部への鋭い注意力といった主張の渦に巻き込まれた。

彼は一歩下がって息を整え、男にまっすぐ向き合って言った。「

「魔女のささやき声だ。」彼は首を振った。「この音は知っている。ただの虫だ。虫の巣が互いにぶつかり合っている音だ。」

男は笑みを消し、顔は石のように固くなり、冷たく言い放った。「虫は喋らない。」

「死者もそうはしない」とラザロは反論した。「もしかして、あなたは心の中で虫の鳴き声を魔女の言葉だと勘違いして、実際には存在しない魔女の存在を信じ込もうとしたのだろうか？」

「魔女はどこにでもいるんだ！」男は腕を振り回しながら叫んだ。「俺が魔女の存在を信じているからこそ、魔女が実在するわけじゃない！」彼は鼻を鳴らした。「お前が魔女の存在を否定しているからこそ、魔女が実在しないわけでもない！」

ラザロは裸の死体を見つめた。「あなたが言うように魔女がいるかもしれないが、ここにいるとは思えない。」彼は一歩前に出て漁師を睨みつけた。「あなたが自称するような名誉ある男として、あなたが自称するような魔女狩り人として、魔女ではない者を殺したことは一度もないと誓えるか？」

男はぼろぼろのドアをちらりと見て肩をすくめ、「まあ、先ほども言ったように、魔女狩りは正確ではない。時には、邪悪な人間が魔女であるあらゆる兆候を示しているが、正確にはそうではないが、魔女狩りなどを行っている。」彼は咳払いをして、口調を和らげた。「魔女狩りをする我々の意図は善意に基づくものであり、彼らを淘汰し、この世の善良な人々から排除するために最善を尽くしているのだ。」

「最善を尽くしているのか？」とラザロは尋ねた。

「我々は」と男は怒鳴り、それから自分の能力を自慢した。「だが、私はほとんどの人よりも経験豊富で、能力も高い。」

ラザロは部屋を見回した。「他の魔女狩り師はどこにいる？」

男は両腕を振り回し、あたりを見回しながら、信じられないといった様子でくすくす笑った。

「我々は至る所にいるのだ、友よ。多くの土地に散らばり、常に身を隠している！」と男は叫んだ。「魔女を保護してくれるかもしれない者たちに、我々は公然と自己紹介などしない。我々の生活は秘密に包まれている。そして覚えておいてほしいのは、私があなたを見つけたのではないということだ。あなたが私と私の魔女たちを見つけたのだ。」

ラザラスは床に視線を落とした。まるで世界の重みが突然自分にのしかかってきたかのような気がしたのだろう。彼はテーブルに横たわる死体の顔を見つめ、ダルシクル卿の洗濯女の懇願する声が頭の中で燃え上がり、こう尋ねた。

「ああ、神様、私たちを救ってくださるのですか？」彼は外扉の敷居をもう一度確認したが、そこには光はなかった。

それから彼は腕を組んだ漁師の方を振り返り、微笑んだ。「君は

「ここ何年かで私を発見したのは君が初めてだ。そしておそらく君が最後になるだろう 私は最高の魔女ハンターの一人だからね。」彼はラザラスを軽く手を振って追い払い、こう続けた。「心配するな。私はいつも、私を見つけるにはもっと時間がかかると分かっていた。」

私を発見したただの男 そして、空飛ぶ男に発見された私はただ呼びかけるだけ

「私の揺るぎない献身、魔女狩りの技に注目してください。」彼は息を吸い込み、ニヤリと笑った。「そして、偉大なる創造主がついに私に報いてくれたと信じています 空を飛ぶ弟子と、傑出した魔女狩り人という形で。どう思う、ラザラス？ 飛行中に魔女を運べるか？ 一緒に世界を救えるか？」彼は一度手を叩き、祈るように両手を合わせて、返事を待った。

「ここに魔女はいない」とラザラスは断言した。「魔女がいない魔女狩りとは、ただの女性殺しに過ぎないのではないか？」

男はくすくす笑いながら、「お前は信仰心が薄いな」と言い、数歩前に進んだ。

「もし私が、ここにはあなたが聞いているという虫の音だけではなく、魔女がいることを証明できたら、あなたは私を信じてくれるだろうか？」

ラザロは、高くぼろぼろになった扉に目をやった。

男はうなずき、「確かに、あそこだ」と言って、ドアの方を指差した。「ちょうどあそこだ。悪行が永遠に償われた多くの老婆や魔女をお見せしましょう。狩人の技の素晴らしさをご覧になりたいですか？」

世界の重みと洗濯女の言葉が心に重くのしかかる中、ラザロはできる限りのことを考えた。彼は高くぼろぼろになった扉、その傍らで燃える壁の松明、そして周囲の空間をじっと見つめた。そしてついに、魚小屋の鉄格子のはまった外扉の方へ一歩後ずさりしながら、「どうぞ、あなたの努力を見せてください」と答えた。

「素晴らしい！」漁師は叫んだ。「我々は魔女狩り人だ！」彼はラザルスに優しく厳しく説教しながら、高い扉に向かって慎重に歩み寄った。「さて、扉を開ける前に、魔女について知っておくべきことがいくつかある。」君の命がかかっているかもしれないんだぞ。分かったか？

ラザロはうなずき、男は続けた。「まず、魔女は体が奪われてもすぐに死ぬわけではありません。つまり、顔が完全に萎びて、元の汚らしい泥に戻るまでは、死んだふりをしているだけなのです。それでもなお、あなたに邪悪な力を及ぼすことができます。ずっと後になって気づいたのですが、魔女たちが一緒に横たわっていると、一人で横たわっている時よりも力が強くなるのです。しかし、この状態を軽減するためには、魔女狩り人が魔女を取り除かなければなりません。」

殺された魔女の首を、同種の他の首の横に置く前に。そしてすべての魔女は、最も古いものから最も新しいものへと、外側から正確な順序で配置されなければならない。中へ。」

「もし、そのような配置になっていなければ？」とラザロは尋ねた。

漁師はラザロに向かって指を振りながら言った。「ラザロ、決してそんな間違いをしてはいけません。」

君が彼らの順番を逆転させる前に、彼らは君を捕らえるだろう。」

「それなら、そんなことはしない。捕まるはずがない」とラザロは断言した。彼は垂れ下がった鎖を切り離し、漁師の後について高い扉へと向かった。

男はくるりと向きを変えて彼に警告した。「何であれ、感じ取ったものには触れてはならない。さもないと、耐え難い病気や精神錯乱に襲われるだろう。」

ラザラスはうなずき、高い扉に近づくと、壁掛け金具から松明をそっと外した。すると男が突然振り向き、ラザラスの腕をつかんだ。「何をしているんだ？」二人はしばらくの間、顔を突き合わせて立ち尽くし、松明の光の下で、青と茶色の燃えるような瞳が互いを見つめ合った。

「君がドアを開けている間に、私が懐中電灯を取ってくるよ」とラザルスは答えた。

男は握っていた手を緩めてうなずいた。「そうか。だが、中には入れないぞ。」

「約束してもらえますか？」

「私は入らない」とラザロは言った。

「お前にはまだ学ぶべきことがたくさんある」男はそう言い、ドアの金属製の留め金を握りしめ、ラザロの方を振り返った。「さて、世界の邪悪な魔女たちよ。最悪の、最も卑劣で汚らしい悪が、永遠に閉じ込められるのを見る覚悟はできているか？」

このドアですか？

ラザロはうなずき、松明を掲げた。「あなたが許すならば。」
「さあ、見よ」と漁師は言い、背の高いぼろぼろの扉をゆっくりと開けた。

扉が軋む音を立て、彼は徐々に部屋の真っ暗な内部を露わにした。暗闇からハエが飛び出し、松明の炎は焼け焦げた虫をパチパチと鳴らし、ラザロの頭と肩に降り注いだ。腐敗臭が漂い、彼はえずき、後ずさりして口を手で覆った。

漁師はくすくす笑いながら、扉を大きく開けた。「魔女狩りをするなら、お前より強い胃袋が必要だ。そして、それを鍛えよう。」彼はラザロの腕をつかみ、扉の敷居に引き寄せると、明かりの灯った部屋の中と、積み上げられた死体の山を指差した。「こいつらは全員魔女だ」と彼は言い、腐敗した死体の山に手をかざした。「古いものから新しいものへ、外側から内側へ、きちんと配置され、首はない。こうして全てがそのまま残されるのだ。」彼はくると向きを変え、ラザロの顔の前で指を鳴らした。「ああ！エンドルに使い魔がいて、サウル自身が探していた老婆を覚えているか？覚えていないのか？エンドルの魔女を？」

「私は彼女のことを覚えていませんが、サムエル記上巻で彼女について読んだことがあります。」

「まさに、あなたの信仰の聖典に記されている魔女だ」と彼は腰に手を当て、ニヤリと笑いながら断言した。そして、くすくす笑いながら胸を叩き、「私が最初に捕らえた魔女だ」と自慢げに言った。さらに親指で部屋の奥を指し、「そして、彼女の首は今も持っている」と付け加えた。

「しかし、あなた方は聖書を、人間が書いた単なる嘘だと呼び、自分は嘘をついていないと主張する。聖書に記されている女性の頭を持っていると主張しながら、どうして真実を語り、聖書のすべての記述を否定できるのか。」

男は両手を差し出し、まるで彼をあらゆる非難や疑惑から解放するかのように眉を上げ、こう答えた。「私の偉大なるラザロよ、私はあなたの聖書に書かれているすべてを否定するわけではありません。人々が神の真理だと主張する他の書物も、完全に否定するわけではありません。すべての書物は歴史に富み、普遍的な真理に満ちています。博識な書記が嘘をつくとしたら、嘘の間に真実を織り交ぜる以外に、一体どうやって嘘をつくのでしょうか？」

「つまり、あなた方は、自分たちの聖典がエンドルの女については真実を語りながら、全能の主については嘘をついていると信じているのか？」

「その通りだ。言った通り、彼女の首は私のものだ」と男はぶっきらぼうに言い、ニヤリと笑った。「お前の神から何か証拠を見せてくれるか？」

ラザロは顎を食いしばり、深く息を吸い込んでから彼を叱責した。「エンドルの女はあまりにも昔の人だ。私は君の言うことを信じない。」

男は眉をひそめ、唸り声を上げながら再び戸口を指さした。「そこにいる。お前が言うように、私が魔女を飼っているとは信じないだろうが、見せてやる。それに、エンドールの魔女を飼っているとも信じないだろうが…」彼は咳払いをして言った。「私の能力を信じないお前の態度には、腹が立ってきた。」

「彼女の首を確実に手に入れたとどうして確信できるのですか？」

「私が本当に持っているのだから、もちろん！魔女は人間のように死ぬことはない！」と男は叫んだ。

「あなたは、何かを信じる前に、すべてを目撃しなければならないのですか？」

「もしよろしければ」とラザルスは言った。

「よろしい、では。」漁師は明らかに抗議するように鼻を鳴らした。「だが、すぐに私の教えを少し信じてほしい。教師であり、経験豊富な魔女狩り師として、私の言葉の一つ一つに異議を唱えることを期待しているわけではない。さあ、

「道しるべとなる光よ」彼はラザロの松明を持った腕を戸口に引き入れ、中へ歩み入り、積み重なった死体を避けながら部屋の奥へと進んだ。彼は振り返って言った。「横たわっている死体の中で、外側から内側に向かって、彼女の頭が一番遠いところにある。」

ラザロは好機を捉えた。彼は開いた扉の端に手を伸ばしたが、そこで立ち止まった。伸ばした指が灰色の木に触れそうになった。彼は我に返り、腕を引っ込めた。

漁師の声は暗い部屋の奥から遠ざかるにつれてますますくぐもって遠ざかり、「これは私の母のふりをした魔女の頭だ」と叫んだ。

そして、父が眠っている間に、父を殺そうとした者もいた。」

再びラザロは腕を上げ、ドアの木の縁を掴み、今度こそドアを閉めて鍵をかけようとした。しかし、腕を回してもドアは閉まらなかった。彼は顔をしかめ、ため息をつき、後ずさりした。

漁師の声はかすかだったが、その言葉ははっきりと聞こえた。「そして父を埋葬した時、私はあの忌まわしい魔女を墓から掘り起こしたのだ」

ラザロはテーブルに置かれた死体の傍らに立っていた。彼はその虚ろな視線に気づき、後ずさりして家の外扉に近づいた。彼は扉の暗い敷居を調べ、夜が更けていることを確認した。突然、彼の耳はぴくりと動き、目は高くぼろぼろになった扉の方を向いた。扉は今やひとりでにゅっくりと軋みながら動いていた。風もなく、ネズミもいない、扉を閉めるものは何もなかったのに、錆びた蝶番が一定の軋み音を立てて扉は動き続けた。ゆっくりと揺れる
ドアがようやく半分ほど開いたとき、漂うドアの縦板の裏側あたりから、死人のように青白い指と黒い爪が伸びてきて、部屋のろうそくの光の中で姿を現した。

ルシファエルが遠ざかる影の中から静かに姿を現すと、彼は身構えてシューッと息を吐いた。高くそびえる荒れた扉の。彼女は扉を閉め終え、そっと鍵をかけて漁師を中に閉じ込めた。それから彼女は向きを変え、黒いガラスの球のような、瞬きもせず光を反射する目でラザロにまっすぐ向き合った。彼女は、まるで朗読会のような、幾重にも重なった声で、多くの女性の声が同時に響くように言った。「エルジョ、あなたはとても近かったのに。それなのに、あなたは他人の命を救うためでさえ、扉を閉めることができなかった。エルジョ、あなたは一体何なの？神のような人？聖人のような人？教えて。」

多くの命を救えるかもしれないのに、たった一つの大きな扉を閉めることすらできないあなたに、その病的な玉座の輝きをまとう資格が本当にあるのだろうか？あなたの偽善と弱さこそが、まさにあなたの破滅を招くだろう。エルジョ、あなたは実に分かりやすい 読みやすい。一体何のためにそんなことをするんだ？

漁師のくぐもった声がパニックに陥って叫んだ。「ラザロ、何をしているんだ？ドアを開けろ！ああ、奴らが動いている！這っている！今すぐ開けろ、ラザロ！」
今！彼らは頭のない状態で立っている！いや！ラザロだ！」

ルシファエルはラザロの方へ歩み寄った。彼女の前には無数のゴキブリが散らばり、床板の道がはっきりと開けた。彼女はラザロに近づき、彼の翼を外扉とそのまだしっかりと固定された横木に押し付けた。彼がこれ以上後退できなくなると、彼女は彼の顔に顔を近づけ、説教を始めた。「あなたが今ここにいるのは、私の迅速な介入のおかげです。あの城からあなたを救い出し、送り出したのは私です。あなたの飛行能力は完全に私のものだったのです。」

私の髪の毛から生まれた豚の巨人よ。私の助けがなければ、とっくに四つ裂きにされ、灰になっていただろう。だが、こうして生きている。息をして、今や私を解放してくれたことに、あなたは深く感謝しているのだ。

彼女はラザロの顔から一歩踏み出し、テーブルの上の同じく裸の死体を調べながら、話を続けようとした。「あなたを救った代償として、イタリアのカンチェッロ修道院まで旅を続けてください。そして、大聖堂の祭壇の下にある最後の門石が開いたら、相応の報酬を差し上げましょう。あなたの奉仕と引き換えに、私はあなたに

—」

「何でも差し上げます」と漁師は必死に懇願して口を挟んだ。「ラザロ、ドアを開けてくれ！何でも欲しいものを！何でもだ！神のために！」

彼は泣き叫び、うめき声をあげ始めた。

明らかに苛立った様子のルシファエルはくると振り返り、ドアの前で爪をカチッと鳴らした。漁師の嘆願は苦痛に満ちた、息も絶え絶えの叫び声へと変わり、鈍い音が部屋の内壁にぶつかり、魚小屋には再び静寂が訪れた。

彼女はラザルスの方を振り返った。「カンチェッロに着いたら、最後の門石を明かしましょう。あなたはそれを開けてください。私は石に刻まれた言葉の順序と正しい朗読法をあなたに教える案内人です。」

「近づかないよ」と彼は答え、ドアにさらに強く体を押し付けた。

彼女は彼に飛びかかった。「さっさと立ち去れ！エルジヨ、私を侮辱したり、私の忍耐を試したりしないで！」

扉を開けて、今すぐ空へ飛び立とう！

彼は横木を持ち上げ、出入り口から遠ざけるように投げ飛ばした。

「そして、あまり長居してはならない。」

ラザロは暗闇の中へ足を踏み入れ、振り返って腐敗した場所を最後にもう一度見渡した。薄暗い魚小屋の内部から、テーブルの上の死体が動いたことに気づいた。上向きに伸ばされた腕がテーブルの縁から突き出され、まるで彼に手を伸ばしているかのように、彼の方を向いていた。揺らめく影と長い影の間、そしてテーブルの焚き火のちらつく光の下で、死体の顔は彼に軽くウインクし、穏やかな微笑みを浮かべて見送っているように見えた。

「急げ！」ルシファエルは彼の後ろから唸り声を上げた。

彼はその汚い小屋から後ずさりした。彼の心は、忘れられないほど混乱と恐怖に満ちた無数の不快な光景と音で混乱していた。それらはすでに彼の心の壁に焼き付いており、残りの人生ずっと彼を苦しめるかもしれないと彼は悟った。それらは今や、彼の腕や脚や翼と同じように、彼の一部となっていた。そして彼は、これらは時を経て人の心を良くも悪くも変えてしまう種類の記憶であり、今や彼の中に存在していることを知っていた。それらを洗い流したり、切り取ったり、引き抜いたりすれば、彼自身を破壊してしまうだろう。彼の服にまだ残る腐敗臭のように、その汚い小屋は今や彼の不可欠な一部となっており、たとえそれが

少しどころではない。

彼は雑草をかき分け、星空を見上げ、群れを残して上空へと飛び上がった。彼の後には、上昇し螺旋を描くハエの群れが残っていた。彼は広大なイトスギの梢を旋回した後、星空へと舞い上がり、そこでついに南へと旋回した。

ラザルスは、長年研究してきた修道院の地図の記憶と、渡り鳥が生まれつき持つ航海能力を頼りに、レオン湾の北岸に飛行経路をまっすぐに合わせようと心に決めた。風のない涼しい夕暮れ、彼は機体を安定させ、水平飛行に移り、遠く離れたイタリアのウンブリアにあるカンチェッロ修道院へと着実に進路を取った。そこで修道士を拾い、フランスのオーヴェルニュ地方へ連れ戻し、上層評議会の厳重に守られた外典文書庫から盗んだ写本を使って、不器用ながらも成功裏に突破してしまった、気まぐれで復讐心に燃える愚かなアヴィニョン枢機卿が守護者修道院の門石を閉めることができると考えたのだ。

【第17章終了】



この文学作品は、

エドガー・アラン・ポー（1809年 - 1849年）

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~